
迷える執事と秘密の恋

阿良々木 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷える執事と秘密の恋

【Nコード】

N4873V

【作者名】

阿良々木 雅

【あらすじ】

彼、大村 誠時が私立浪嵐学園に転校生としてくる物語。転校したクラスには、お嬢様とのお嬢様に仕える執事がいた。クラスメイトとなった涼月奏の執事、美少年・近衛スバルの秘密を偶々知ってしまう。どうやら近衛は家庭の事情というやつで、女の子であることがバレると執事を辞めなくてはならないらしい。彼、大村誠時と坂町近次郎は、その秘密を死守するため涼月に色々協力する八メになる。更に俺のファンクラブが存在していたり、BL好きな奴らに同人誌を創られられたりしているいろいろ大変困ったことになって

しまう。これは、さまざまな女の子たちと過ごす賑やかな学園恋愛^{ラブ}物語^{コメ}になっております。『まよチキ!』アニメ化記念にて書かせていただいております。一部、ストリートファイトやバンドなどあり。【現在：書き直し中／改良】感想などドシドシ書いてください。ただ荒らしなどはやめてくださいm(´)_(´)m【企画：番外編＆ラジオ】現在PV84211アクセスありがとうございますm(´)_(´)m【原作：まよチキ!／原作者：あさのハジメ先生／原画：阿良々木 雅】現在書き直し完了話／第一恋のみ

第一恋 出会いの季節（前書き）

朝に出会った皆様には、おはようございます。

昼に出会った皆様には、こんにちは。

夜に出会った皆様には、こんばんは。

新しく出会えた皆様には、はじめましてm（ ）（ ）m

『まよチキ！』タグを利用しての皆様。作者／読者の皆様。どうも。お久しぶりです。この作品【迷える執事と秘密の恋】の改良＆書き直しを決意し現在執筆奮闘中です。

今回から挿絵が加わっています。絵師は僕こと阿良々木 雅です。もちろん本編も、です。

原作『まよチキ！』第10巻は1月25日発売予定らしいです。

第一恋投稿日2012年1月9日。

では、前書きはこの辺りにします。

誤字／脱字／漢字変換ミスなど、あるかもしれませんが、どうぞその辺りを御了承の上で【第一恋】をご覧ください。

【第一恋／CAST】

大村誠時

仲村大地

柏木友哉

崇城遥

坂町近次郎

この物語はフィクションです。スバルたちは登場しません。

第一恋 出会いの季節

1日は意外に早い。彼、大村誠時はそう思っている。何故ならどんな夜もいつかは明ける。どんなに明日という日が来るのが嫌でも明日はやってくる。それが、1日というモノだからなのかもしれない。

……………う…んー。

ほどよい太陽の眩しさが俺の意識を深い闇から目覚め（覚醒）させる。

カーテンと窓の隙間から心地よく差す光を浴びるため俺はベッドから起き上がりカーテンを開け放つ。

「……………んー。いい天気だな」

腕を頭より上に伸びをし、軽く深呼吸をする。そんな一連の動作を行った俺はクローゼットから“新たな学園の制服”を取り出し終えると、次は机の上に置いてある整髪料と鞆を持って一階へと向かう。しかし、一階も二階も人の気を感じさせないくらい静かだ。そう彼、大村誠時には血縁、家族がいない。だが彼は寂しいと思っていない。何故なら俺には友達がいたからだ。両親が居ないと生活費とかが大変だが、そこはアルバイトでやりくりしている。まあアルバイトの金だけで生活費を完全に補えるわけじゃないから親の遺産に甘えてしまう部分があるのが現状というところだ。

「……………って、俺は誰に説明してんだろっな」

さて、こんな暗い話をするよりも先ずはシャワーでも浴びるかな。郵便ポストから新聞紙を取りリビングの机の上に置く。制服と整髪料を持って浴室へと向かう。

別に目覚まし代わりにシャワーを浴びるわけではない。まあそう言うが一応目覚まし代わりだったりもするのだが、ん？じゃあなんでシャワーを浴びて目を覚ますのかって？それは心機一転だ。心機一転して気持ちを引き締めるためだ。

なんで引き締めるかって？それは今日から始まる、新たな学園生活謳歌できるようにするためだ。

そう、つまり彼は転校生なのである。転校と言っても、地元の私立校に行くだけのことだ。距離的には普通で徒歩か自転車で登下校できるぐらいの距離だ。

浴室へと続く脱衣所で服を脱ぎ捨て浴室へ入った。

x

シャワーを浴び終え、浴室から出た俺は濡れた髪と肌。今先ほどシャワーを浴びたということをしめしている肌などをバスタオルで拭いていた。

「ふう………」

髪と肌を拭き終え、下着を着てから新しい制服を着た。

着終えた制服を軽く整えた俺は髪を整髪料で整え始める。何も

かも整え終えた彼はポケットの中にしまい込んでいた携帯電話（b

u b y K D D I）の液晶画面を見て時間を確認する。【AM:

07:02】

まだ時間的には、ゆっくりできると感じた俺はキッチンへと向かった。

向かったのはいいのだが調理するわけではない。昨夜の残りを温めるだけだ。ちなみに昨夜の残りは……ボンゴレパスタと野菜スープだけだ。一人だと必ず自炊しないといけないから、さ。一応自炊できるんだ。

「……って、また誰に言ってるんだか」

……

朝食を食べ終えた食器を片付け歯を磨くために脱衣所兼洗面所に向かった。

磨き終わると、ピンポーンと。

玄関のインターホンが鳴った。

どうやら誰かが訪ねて来たようだ。

「今、出ます」

ちょっと制服のネクタイを整えながら玄関まで行って扉ドアを開ける。

「おはよう、誠時」

開け放たれた扉の向こう。

そこにいたのは何とも懐かしの人物と懐かしい声音だった。懐かしいといつても一年間会わなかったぐらいの懐かしさだが、やはり懐かしい感が溢れ出すぜ。

「……宗城？」

と、俺は言葉を出した。

そう、扉ドアの向こうに居る人物に。

すらっとし程良く筋肉がついているだろう足に、綺麗な顔立ちパスカルのな色彩の短くて青い髪、透き通った瞳。そして、何より俺の幼馴染みの一人。

宗城 遥。

今現在我が家の玄関の前にいるのは宗城 遥に違いなかった。

大村は軽く首筋を掻き、次の言葉を探している最中、そんな彼の状態を見ていた宗城の口唇くちべが動いた。

「浪嵐学園へ転校してくるのは本当みたいだね誠時」

その一言で……気が付いた。

そういえば遥に私立浪嵐学園に“転校”するっていうことを教えた覚えがないのだが……。誰が教えたんだ？

……ん？待てよ。もしかして“アイツ”か？と、思った俺は遥に訊いてみることにした。

「遥……その話、もしかして“友哉”から聞いたのか？」

「何が？何の話？」

「いや、何の話って……浪風学園に転校するんだってお前さっき言っただろ？」

遙は思い出すかのように、

「あー、それかー。そうそう、友哉から聞いたよ」

……。

やっぱりか。

口が固いのか口が軽いのか、わからないヤツだと思ってはいたが、まさか、ここまで軽いとは……。

軽く溜息を吐き出しながら整えた髪を軽く掻き乱す。

けど……どうせ、学園に行ったら遅かれ早かれ知ることになるワケだし構わないか。

それに友哉のおかげで遙と、出会えたから良しとしよう。

「それじゃ、学校に行こっか 誠時」

と、にこやかに言う崇城。

不意に来た笑顔に、ドキッとしながらも俺は「そうだな」と返答し私立浪風学園へと向かうのだった。

突然の遙の来襲？によつて久しぶりになんかドキドキしている俺がいる。

まあ、このドキドキは新たな学園生活へのドキドキなのか遙がいるからなのかは“今”の俺にはわからないことだ。

季節は桜が咲き誇っている四月序盤。春夏秋冬でいうと春にあたる季節だ。

春で思い出したのだが、春は出会いの季節らしい。まあ、それは俺も納得している。何故なら春は全てのことが始まる時期だからだ。そりゃ、新年が新たに始まる時期といつても過言ではないのだが、春は何もかもが初々しく感じる。新学年へと進級したり、就職したり、様々な出会いがあるんだ。

さて……この話は置いといて現在の登校中の話（本題）に戻そう。

何故「出会い」という話をしたかというと、“俺の身に起きたからだ”。

え？もう起きてるんじゃないかって？まあ、そうかも知れないな。今、俺と遙は住宅地の道路、右寄りの所を二人並んで歩いている。

「ねえ誠時 同じクラスだったらいいのにねー。それなら寂しくないでしょ？」

「ば、馬鹿か。誰が寂しいって言ったよ」

「誠時だけど？」

「そんなこと、俺は一言も言ってない」

「強がっちゃってー。強がりにはよくないんだぞー？ウリウリー」

すると、崇城は大村の頭をワシヤワシヤーと撫でつけた。

「……はあ。もう、なんとも言えよ」

溜息混じりに呆れた声を出す大村を見て笑っている崇城。端から見れば友人ではなく恋人に見えるのかもしれないくらい仲が良い二人だ。

にしても、遥のテンションが高過ぎるような気もする。

そんなことを考えていたら、遥は「おはよー」と言いながら手を振り出した。

……。

どうしたんだ？と思った俺は遥が手を振っている方へと視線を向ける。

……なんだよ。なんか目が見えなくなってきたぞ。気のせいかな？と思うくらい嬉しさが込み上げてくる面子がいたんだ。

大村が視線を向けた先……住宅地の十字路にあるミラーのところ
で手を振っている人物が二人いた。

目の前に見える人物たちと合流すると、ミラーを支えている棒に
凭れながら牛乳瓶を口にしていた茶髪の男子生徒がいた。

彼の名前は仲村 大地。大村の幼馴染みの一人でもある。気さく
な性格で、大村と初めて会った頃一番早く仲良く遊んでいたのは彼
だろう。

「おはよう。大地」

「……おはよう、誠時。その制服似合ってるじゃんかよー」

「そ、そうか？」とネクタイを触ろうとした大村の首に、もう一
人……金髪の男子生徒の腕が回される。そのままぐいってヘッドロ
ックされてしまう。

「久しぶりだな。誠時。大地の言う通り似合ってるじゃん」

などと言っている彼の名前は柏木 友哉。

まだ見慣れない浪嵐学園の制服のボタンをとめずに前が全開にな
っている上にネックレスを着けていた。一番目を惹かれるところは、

やはり髪色だろう。校則を守っているのかと思うくらいの金色だった。

「まあ、俺の金髪に比べたら月と鼈だけど、な」

誠時をヘッドロックから解放すると、柏木は近くにあった石ころを拾い上げ掌の中投げていた。

「まあ誠時は何しても似合っからねー」

「まあ、そっだな」

「だなー」

褒め言葉を言われた誠時は、少しだけ気恥ずかしそうに鼻の頭を掻いた。

「ったく。転校日、早々に褒めてんじゃねえよ。恥ずかしくなるだろうが」

そんな言葉ことを言いながらも嬉しそうに歩き始めた誠時。彼のすぐ後ろを崇城、柏木、仲村の三人がついていく……三人とも誠時と同じように嬉しそうな顔をしながら……桜が舞い散る道を歩き学校へと向かうのだった。

×

「おはよー、ジロー」

私立浪嵐学園。

校門前。突然、大地が目の前にいた男子生徒……名はジロー？に挨拶をした。

「というか、俺たちを待っていたようだ。携帯電話で時間を確認していたからだ。」

「……お、やっと来たか大地」

「ああ、悪いな。待たせたみたいで」

「いや、そんなに待ってないからいいよ」

「そうか？なら、いいけど。あ、ジロー。この前言っていた転校生を連れて来たぜ」

俺を紹介する大地。

誠時と顔を合わせる事になった男子生徒は軽く会釈をしてから手を差し出した。

……握手か。

俺は差し出された手を握りしめ少し早い転校生らしい自己紹介を

する。

「大村誠時だ。これから、よろしくな」

「俺は坂町近次郎。よろしく大村」

互いに自己紹介をした俺と坂町は握り合った手を離し大地たちと再び歩き出した。

「あ、坂町。俺のことは名前で呼んでくれ」

と、歩きながら俺は坂町に言った。

「……いいのか？まだ知り合ったばかりで名前なんて」

「構わないさ。大地の友達なんだろう？なら俺とも友達になろうぜ。それには、まず名前からだろう？」

僅かな沈黙。まだ少し冷たく感じる春の風が吹く。

彼は……坂町近次郎、ジローは考え込むように黙ってから、

「……わかった。なら、“誠時”俺のことは“ジロー”と呼んでくれ」

少し気恥ずかしそうに誠時の名を呼んだ坂町。

……やっぱり、いい奴じゃなか。さすがは大地だな。大地の奴、昔っから人の見る目はしっかりしてたからな！。

「“ジロー”か……これから、よろしくなジロー」

軽く微笑みながら誠時も坂町のことを「ジロー」と呼んだ。

……すると。

突然、脈絡無しに友哉が、

「今から走って行こうぜ！」

などと言ったのだ。

「おい。友哉。走ってて……うーん、まあいいか」

友哉の提案？に大地は軽く承諾し鞆を肩に引っ掛けるようにして持ち、もう片方の手には坂町の手を引っばるように握りしめ「じゃあ、行きますか！」と言って三人は駆け出した。約一名は引っ張られてだが……

「……ねえ、誠時」

……と。

遙も、鞆を肩に引っ掛けるように持ちながら、俺を呼び肩を並べて歩いて……。

「昔みたいに“これから”も、よろしくね」

「……ん？」

「……だ、だから、その……昔みたいに一緒にいたいなって……大地や友哉たちと」

「……そうだな」

「うん」

『<http://www.2071553/117147050>
photozou.jp/photo/sh

挿絵です。絵下手な挿絵ですが、見たい方はどうぞm()m()

『m

元気よく返事をした遥の顔を見ると、うつすら頬が赤く染まっている。

……久しぶりに見る幼馴染みの笑顔。

そして、前景に映える（みえる）三人の楽しそうな姿に俺の頬は自然と緩んだ。こんな素晴らしいくらいの一時を俺はまた迎えることができたことに対しての緩みなのかは、わからない。

けど……。

今、俺が感じている嬉しさは偽物ではない本物の嬉しさだ。嘘偽りのない嬉しさ。

……もう、なんていうか、さ。まだ学園にすら行ってないのに、こんなにも楽しい生活が待っていたなんて……最高過ぎじゃねえーかよ。そんな最高の光景に浸っていた俺に遥は。

上目遣いのまま、可愛いらしい笑顔で微笑んで……。

「……誠時。アタシたちも走る」

そう言うと、元陸上部だった崇城 遥は、車のエンジンをふかすように前景に見える三人に向かって走って行った。

疾り（はしり）去るかのように、風を切り裂くかのように。

「……ったく。アイツ等は」

やっぱりさ。

人間……笑ってる方がいいよな。

春の風が吹く太陽の下。

俺は疾り去るかのように走っていった遥の後ろ姿を眺めながらそんなことを思った。

季節は四月序盤。

もうすぐ誠時たちにとって待望の高校二年生の学園生活が始まる
。。

「『『『誠時！』』』」

もう遠くにまで行っていた四人……坂町近次郎、仲村大地、柏木友哉、崇城 遥たちは少し大きな声で彼の名を呼んだ。

そう……

この物語の主人公……いや、登場人物、大村誠時の名を。

「ああ、今、行くから待ってる」

即答した俺は、前景で待っている四人のもとへ走って行くため桜が散り落ちているアスファルトへと一歩、また一歩と踏み出すのだ
ろう。

こうして、彼の青春という名の物語は始まりを告げたのだ。

第一恋 出会いの季節（後書き）

【迷える執事と秘密の恋】を一話ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【迷える執事と秘密の恋】を七話まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

【迷える執事と秘密の恋】の書き直し&改良話第一話目を読んでくださった皆様、ありがとうございます。

お久しぶりですね。皆様。書き直し中に目の疲労感があった、阿良々木 雅です。

いえ、たぶん目は大丈夫です。僕は失明しません（笑）目見えな
い方々にはすみませんm（ー）m。

今回、いや今年から書き直し&改良&新たな話を執筆したいと思
っています。そして、ついに明日1月10日……学校です。うーん
メンドクサイなー。なんて思っています。まあ、頑張っ
て行きますが。

さてさて。そんな感じで書いた『まよコイ!』ですが、読者の皆
様。挿絵はどうでしたでしょうか？それが気になっています。この
作品のヒロインはただの執事ではなく男装執事。更に主人公もただ
のイケメンではなく天涯孤独なキャラです。そして、そこに様々な
キャラたちが加わり、ドタバタとした学園ラブコメにするつもりで
す。

そう、ラブコメ、恋愛です。いきなり脈絡なく話は変わるので
すが、原作のまよチキ!の絵師様の菊池政治先生がPCゲームの絵
師さんとして選ばれました（ー）菊池政治先生おめでとうござ
いますm（ー）mまあエロゲーですが……でも!いい!素晴ら
しいです。

『迷える執事と秘密の恋』の更新を待ちに待っていた皆様には本
当に申し訳なかったです。ただ、1からやり直しなので、かなり内

容など変わりますので期待しててください！まあ、あまり大きな期待は……しないでください。この『まよコイ！』の書き直し投稿ができたのも、本当に読者の皆様のおかげです。心より深くお礼申し上げます。

そろそろ字数がヤバいので、この辺りで……。

最後に、この作品を読んでくださった読者の皆様に、この場ではとても伝えきれない深い深い感謝を。

それでは、また皆様とお会いできることを願いつつ、執筆のアクセルを踏み込んでいきます。なので、これからも、また阿良々木雅を、どうぞよろしく願います。

【迷える執事と秘密の恋】略して【まよコイ！】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

次話も読んでいただけることを願いつつ。

今回は、ここで終わりにさせていただきます。

阿良々木 雅

第二話 秘密だぞ（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます

昼に出会った 皆さんには
こんにちは

夜に出会った 皆さんには
こんばんは

まよチキ！
タグ？で作品を書いている方々、読者の方々。
どうも

阿良々木 雅です。

『まよチキ！』第五話目の宇佐美マサムネのヘルメット姿にかなりの可愛さを感じました。
にしても、ジロー。バイクに引かれても死なないって……アンタす
ごいよ……。

今回は文字数が多過ぎました。アニメ一話目と同じところになって
おります。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ一瞥ください。

では、第二話目を楽しんでください。

第二話 秘密だぞ

学校まであと少しの距離：1台の黒い車が横切る。
その横切った“黒い車”から出てくる人影が1つ。

華奢で小さな体躯。

豪華な制服？

しなやかな髪を後ろで

束ねた髪型。

アンティークドールのように端正な顔付きをした少年。

何故

少年なのか：それは、執事だからだ。

まあ、俺は来たばかりだから、知ったかなのである…

その執事少年は“黒い車”から学園で名が広まっている 涼月奏
の手をとり車から安全に降ろす。

涼月奏。

どうやら彼女は、この学園（私立浪嵐学園）の理事長の一人娘らしく
く ゆくゆくは この付近一帯をしきっている名家・・・『涼月』の
本家を継ぐと言われている筋金入りのお嬢様らしい。

あ…涼月についても 知ったかだぞ。

「また…俺は誰に説明してんだか…」

まあ、浪嵐学園での アイドル的 存在らしい。

するじ…

「うらやましいよな。あー 1回でいいから 近衛と立場変わった
いぜ」

後ろから、大地が話しかけてきたのが わかった俺は ヘッドホ
ンをはずした。

「近衛？ あの執事のことか？」

「ああ、近衛スバル。涼月奏の執事だ。にしても うらやましい
ぜ」

すごく悔しそうにしているが、無視していよう。

「執事か…そもそも執事なんか仕事 現代社会に残ってたんだな」

俺は大地にそう言い残し、学園の門を通り過ぎる予定だったが…
目の前で 転けそうになっている人物の手を握りしめた。握りしめ、
無事を確認するために顔を覗き込むと………執事クンだった。

「……………」

「……………大丈夫か。近衛」

そう名前を呼んで無事か確認をとる。

転けてないのに、なぜ確認するんだ俺は…そう考えていた。 助
けられた近衛は、少し困った顔をしている。

その顔を見た俺は、握っていた手を離し、校内へ入っていった。

「……………」

x

「顔色悪いぞ。なんかあったのか？」

「……………いや。最近寝不足でさ」

ズキズキと痛む頭を押さえる。 あー、頭痛い。 やっぱり寝不足が祟ったのかもしれないな。

「そうか。なら放課後にでも保健室に行ったら？」

そう心配してくれた大地に

「…そうだな」

と告げた。大地はよく俺のことを見ている。体調が悪いことを先
生より わかつている奴だからな。本当に勘がいいのか。まぐれな
のかは、わからないけどな。

「なあ、ちよつといいか？」

「…なんだ？」

「いや、おまえのファンクラブができたことを知っているか？」

……は？ファンクラブ？いやいや、ちよつと待て。待てよ！？は
あ！？ファンクラブだと！？そんな馬鹿な話 あるか？うっ……そん
なことを考えていたら 余計に頭が痛くなってきた。

「そんなこと……知らないに決まってるだろ」

頭を押さえながら少し顔を歪めていた。かなり疲れが出たよ……。

「そうか。 ならいいけどさ。 気を付けるよ、おまえをストーカーする奴らも出てくるはずだから」

そこまで言つて、大地は自分の席に戻り黒板の方を向いた。教室の扉が開いて六限目の教師が入ってくる。今日も何の問題もなく、俺たちの学園生活は始まっていた。

あー にしても頭が痛い。俺の隣は執事クンだ。まあ、朝のことがあったからなかなか話にくい。そんなことを考えていた。

教師の長い討論のような授業が始まる中、俺は音楽をイヤホン越しに聴いていた。そうして俺の意識はゆっくりと眠りに落ちていった。

x

六限目の授業の終わりを告げるチャイムが、学園に鳴り響いた。

闇から覚醒した（目覚めた）。机に突っ伏していただろうと感じさせる額の痛み。

教師が出て行くと、もう教室の空気は自由な放課後になっている。

「……………終わったか」

学生服姿の俺は、机の上に広げてあっただろっ英語の教科書をパタンと閉じた。

それから、何気なく立ち上がり保健室に向かった。

保健室で知ることになる秘密をまだおれは知らない時だった……………。

x

「…なんか、とんでもない夢でも見てたような気がするな」

ゆっくりと戻った（覚醒）意識と鼓動するように、今まであった出来事が思い出されていく。

「……なんて、目覚めた」

最悪だ。超最悪過ぎる。

とんでもない夢を見ちまった。あのスバル様が女だった。しかもそれを知ってしまった俺は殺されかけた……なんて。思い出しただけでも怖気が走る。悪夢だ。悪夢以上の夢かもしれない。

「……起きるか」

ため息を吐いて呟いた。

枕元にあつた眼鏡をかけて視界をはつきりさせる。とりあえず今は何時なんだ？さすがに無遅刻無欠席なのに遅刻するのは勿体無いらなあ。

「……って、あれ？」

霞んだ視界が回復していく。そこにあるのはおかしな光景だった。まず、俺の部屋じゃない。天井にある細長い蛍光灯。それに照らされる薬品。薬品をしまったある棚と大きな白いベッド。何もかもが見慣れた部屋とは違っていたんだ。

保健室。

間違いない。何回か来たことがあるからわかる。ここは学園の保健室だ。

でもどうして保健室なんかで寝てたんだ？

とりあえず、起きよう。

寝起きの脳ミソで判断した俺は被っていた布団を剥ぎ取ろうと右手を動かした。

……が。

ジャラっという聞き慣れてない音と共に、右手の動きが止まる。

「……」

動かない右手。聞き慣れない音。耳障りな金属音。

不審に思っただけで見ると、そこには銀色をした金属のわっか。手錠。

手錠。

手錠でありますよ。

ってなんだ！このノリ！

驚くことに、銀色で無機質な拘束具が、俺の右手とベッドの柱をしっかりと繋がっていた。

くそ、ダメだ。動かない。

「……っ！」

不意に鈍い痛みが走った。頭痛。それもかなりひどい頭痛だ。思わず左手で頭を押さえる。

「……ん？」

待てよ。左手は動く。

動くってことは、左手は繋がれてないのか？

可能性を信じて、左手を動かしてみる。やっぱり。繋がれているのは右手だけか。自由に動く左手。少しでも状況を把握しようとおもった俺は、左手で被っていた布団を引っばった。

「……………っ!？」

その瞬間……

二度目の悲鳴が出そうになった。

女の子。女の子だった。

隣で寝息を立てている女の子は、“近衛”と同じ、一般生徒とは別物のどこかブルジョワな感じの制服。普通なら校則違反なのだが、この浪嵐学園の理事長の娘という特権がある。

この浪嵐学園で女子にとっての憧れが近衛なら、隣で寝ている彼女こそが男子にとってのアイドル。

抜群のプロポーションと美貌。クール&ビューティーといった言葉が似合う。

そんな印象の落ち着いた物腰。
頭脳明晰、文武両道というパーフェクトな成績を持つ…完璧と言える。

本当の優等生。

涼月奏。

そう、あの近衛が【お嬢様】と呼んで仕える主でもあり、この学園の理事長の娘でもある。

でも、なんで、どうして。

どうしてそんなヤツが、俺の隣で寝てるんだ？

「う、ん…」

女の子。

間違はなく今俺の隣にいるのは女の子だ。近すぎる。小さな寝息が吹きかかりそんな距離である。

「……。あら、起きたの？坂町くん」

凜とした響き。目が覚めた涼月は、ぱっちりと瞼を開けベッドから降りた。

「大丈夫かしら？その手錠、痛くない？一応サイズ的には小さくないと思うんだけど」

「……は？」

……。

ちよっと待てよ。

この女（涼月）、今何気に……おそろしいことを言わなかったか？

「安心して、坂町くん」

状況の整理がついてない俺に、涼月はいつもの落ち着いた調子に戻った感じで続けた。

「手術は、無事成功したわ」

「……………え？」

「これであなたも、晴れて改造人間よ」

「な、なにいいいいいいっ!？」

自分でも驚くほどの大きさを叫んでしまう俺。

「じゃ…手術ってのは改造手術だったのか!？」

……どうしよう。涼月奏。この女、意外に精神年齢が低いかもしれない。

「さあ、改造手術を受けたあなたはもう普通の人とは違うわ。試しに『変身っ!』って叫んでみて」

「な、なんだと!? よ、よし! わかった! いくぞ!」

俺は、いわゆる戦隊ヒーローの『変身っ!』ポーズをカッコよく
きめながら、叫んだ!

「へんっしんっ ー!!」

保健室が静寂に包まれる。

……………。
当然なんだが、何も起こらない。変身なんてするわけがないとい
うのに、俺は何をやっているんだろう。恥ずかしいぜ、高校生にも
なって『変身っ!』とか叫んでしまったよ……………。

「く、ふふふ。く、あはは……………高校生にもなって変身……………。あは、
あははは。ほんと、すごい。」

笑い声が聞こえる。

ん？笑い声？信じられない光景。あの涼月奏が笑っていた。お腹を押さえ、涙目になっていた。

「あの……涼月さん？ ちょっと訊いてもいい？」

いくつか質問がある俺は、涼月に訊いてみることにした。しかしコイツ、本当に“涼月”か。なんか印象とのギャップがありすぎる。普段の涼月は……おしとやかで、深窓のお嬢様って感じだったのにな。まあ、綺麗な顔つきはなんら変わりないんだけど。

「ふふ、何かしら坂町くん。それともクラスのみんなみたいに『ジロー』って呼んだ方がわかりやすいかしら？」

「別にどっちでも構わないけど……」

俺、坂町近次郎は『ジロー』という名がある。まあ名があるとい

っても昔からある俺のあだ名だ。坂町近次郎。略して『ジロー』だ。

「ありがとう、ジローくん。じゃあ…訊きたいことをどうぞ」

と上品に微笑む。いや、涼月がすることはすべて上品に見える。

やっぱりコイツは涼月奏だ。学園一の美少女。普通に喋るだけで上品に見えるのは、やはり涼月しかない。

「じゃ、じゃあ…俺のことを手錠で繋いだのって、おまえ？」

「そうよ。気をつけてね。それが外れると、ジローくんの右手の封印が解けちゃうから」

「何だ、そのかっこいい設定」

本当に俺はバトルアニメか戦隊ヒーローの登場人物か。

「まあ、その内容は置いて、次だ。なんでおまえが俺と一緒に寝てんだよ」

「あら、いけなかった？心配しないで。私だって左手一本のあなたに犯されるつもりはないから」

「俺をどんな人間だと思ってんだよ！」

誰がそんなことするか。もし仮にもそんなことができたとしても、俺にはそんな勇氣はない。

「……そういや、保健室の先生は？」

時計を見るとまだ夕方の六時ぐらい。普段なら、この時間帯には保健教諭の仲本先生が待機しているはずなんだが、今日は何故かない。あの人、職務を放棄していなければいいのだけれど。

「出て行ったわ。ぽっぺたを札束で往復ビンタしたら」

「買収したのか…」

つまり、俺の人権は人知れず売買されていたということか。それにしても仲本先生、札束で俺の命を売る教諭って一体…。

すると涼月はベッドに座り、ゆっくりと俺に迫る。

「つまり今、ここに居るのは“あなたと私だけ”あなたを生かすも殺すも私次第。全ての生殺与奪権を握っているのよ」

涼月は静かに唇を歪めた。

……不吉な予感がする。本能的な恐怖を感じた。

「さて、どうしようかしら。まずは耳？それとも去勢手術？」

「待った！何が望みだ！」

がちやがちやと鈍い金属音がする手錠を鳴らしながら全力で叫んだ。

今、認識を改めた。コイツはただのお嬢様じゃない。ただのお嬢様が、こんな性格してるわけがないんだ…！

「勘違いしないで。あなたを拘束しているのは、あなたが私の執事の秘密を知ってしまったからよ」

やっぱりか。アレは夢じゃなかったんだ。どうしようもない現実。
つまり……

「…なんで近衛って男の格好で学園に通ってるんだ？」

一番の、それも重大な疑問を訊ねた。コイツなら…いや涼月なら、
近衛スバルの主であるこの女なら、すべての謎を知っているはずだ。

「強いて言うなら、家庭の事情ね……スバルの家系いえの男子は代々私の
家に執事として仕えてきたの。でもスバルは一人っ子で他の執事
の仕事を継ぐ者はいなかった。女だから本来は執事になれないのだ
けれども、どうしてもとスバルは頼み込んだの」

「…そうだったのか。じゃあ仕方ないな…」

家庭の事情。そんなことで執事をしていたのか…。

「けどね。私の父……つまりこの学園の理事長が、条件を出した。三年間誰にも女だと知られずに学園生活を終える。それくらいできないと女に涼月家の執事は務まらないって」

「……え？それってつまり……」

「そう。スバルは今日、あなたと“もう一人”に自分が女であることを知られてしまっているの」

もう一人？それは一体誰なんだ。
すると……。保健室の扉に向かって行く涼月。よく見ると人影があった。

「聞いていたんでしょ？入ってきたらどう？」

扉の前で誰かに眩きながら言っていた涼月……。その眩きを聞き取ったのか、保健室の扉が動いた。聞いていた……。いや、この場合なら聞いてしまったのかもしれない。そして、聞いていた人物が姿を現す。

「……………はあ」

めんどくさそうにため息を吐いていた人物：

大村誠時。

編入試験の結果が好成绩だったらしい。

整った顔つきに時折見せるめんどくさそうな態度。

これが大村誠時のデフォルト。

少なくともクラスメイトである俺はそう認識している。大村は友達である仲村以外とはなかなか話さない。まあ、転校してきて一週間しか経っていないから仕方ないんだが。最近ではファンクラブもできたそうだ。

突っ立っていた大村は保健室の扉の鍵を閉めた。

「これで、問題無いだろ」

「そうね。まあ、あなたは朝スバルを助けてくれたから何もしないでおくわ」

何も？拘束のことなのか？

ジャラジャラと鈍い音がなる手錠に視線を落とす俺。

そういえば、近衛はどこにいったんだろ。いつもなら涼月の側にいるはずなんだが。まさか、秘密がバレたショックで不登校になったんじゃない……。

そんなことを考えていた俺とは違った大村は…

「……近衛はどこにいるんだ？」

「ふふ。心配してくれてるの？まあ、あなたたちが会いたいのならすぐに会えるわ」

「……え？」

もしかして、この保健室にいる？どこに？

涼月はもう一つのベッドに歩いて行って、そこを仕切っていた力
ーテンを開けた。

「な……」

瞬間、言葉を失った。時間すらも止まって感じた。
俺が拘束されているベッドの隣にあるもう一つのベッド。
そこに、近衛スバルはいた。

「んぐっ！んんぐぐっ」

声にならない声があがる。

当たり前だ。リングギヤグというのか知らないが、近衛の口には黒い口枷が無理矢理詰め込まれていた。

口枷だけじゃない。手錠と銀色の鎖…さらに南京錠。

……拘束。

目の前の光景は、もはや非日常だ。

拘束されていたが、近衛に比べたら俺の方が生易しく感じる。その文字通り近衛スバルは徹底的に拘束されている。

「お、おい、こ、これは、どついうことだ……？」

いつも通りに発した声が震えていた。そんな俺は震える声で訊ねた。

「えー、せつかくジローくんの為にしてあげたのに」

「俺がいつそんなこと頼んだ!？」

「きつと言んでくれると思ったのよ」

「あいにくこんな特殊な趣味は持ち合わせてねえんだよ!」

こんな状態は、アブノーマル過ぎる。

そんなアブノーマル過ぎる場面に出くわしてしまっている俺とは
違い大村はベッドホンをつけて音楽を聴いていた。

「そう?じゃあ外してあげた方がいいのかしら?」

「当たり前だ」

「わかったわ。後悔しないでね」

「するか！」

そんなことを後悔したら人間的に終わってしまう。それにしてもなんてヤツだ。涼月奏。自分の執事を拘束するなんて、頭のネジが1、2本抜けているのかと疑ってしまう。

「げほげほっ！」「ごほっ！」

がちやがちやと鈍い音がする。リングギヤグが外され、近衛が咳き込んだ。

「げほっ！ ひ、ひどいです、お嬢様！ どうして、どうしてこんな

「ことをするんですか!？」

咳き込みながら、抗議している近衛。自分の主に拘束されたんだ。労働基準法違反だろう。けど、もう心配ない。あとは身体を縛っている鎖。手錠。南京錠さえ外せば、近衛は自由に……ん?じ、自由?

「早く……この鎖を外してください! じゃないとそこの変態を殺せません!」

……あれ?おかしいな。耳悪くなったかな?今ひどく物騒な言葉セリフが聞こえたような気が……。

「そんなに焦らなくても大丈夫よ、スバル。今すぐ外してあげるから」

その言葉通り、涼月が近衛を拘束している鎖に手を伸ばしていた。

「ちょ、ちょっと待て！ 待ってくれ涼月！」

ピタリ…と。

俺の言葉に涼月奏の行動が停止する。

彼女は、くすくすと心底楽しそうに口唇くちちんめを吊り上げていた。

「教えてあげるけど、ジロークン。理科室で滅多打ちにされていたあなたを助けたのは私。暴れるスバルを止めたのも私。どう？ジロークン。少しは自分の立場がわかった？」

「……はい、わかりました、涼月さん」

「え？今なんて言ったのかしら？よく聞こえなかったから、もう一度お願いできる？」

「……はい、助けただきありがとうございます、涼月様」

「ふふ」

満足気に微笑んで、涼月は鎖から指を引いた。

……。

……今わかったことがある。涼月奏。

この女、間違いなくSだ。しかも鬼畜に近いDS。これが学園一の美少女の本性……。

「そんな！この鎖を外してくださいお嬢様！今すぐ、コイツの息の根を止めないと」

ガチャガチャと鈍い金属音が聞こえた。南京錠を揺らしていたからだった。

「…おい、そんなに暴れるなよ。そもそも、あれは事故だ。それに、おまえはもう十分俺を殴ったんじゃないかねえのかよ？」

「黙れ！　殴ったと言ってもそこまでじゃない！消火器で殴った程度だ！」

「思いつきり殺人未遂だろう！」

俺じゃなかったら、きっと三途の川の船で運ばれてるぞ。…うーい
うときだけは自分自身のタフさをありがたく感じる。

「そもそも、男装してるのに女物パンツ穿いてるおまえが悪いんだ
ろ」

「男物の下着なんか気持ち悪くて穿けるかっ！」

「胸にも、サラシとか巻いとけよっ！」

「体育のあと、巻き忘れたんだ！」

はあはあと息を整え、気持ちを抑える。
近衛も息を整え、気持ちを抑えてから、

「……おまえのせいでボクは執事をクビになってしまっただぞ！
どうしてくれるんだ！」

「……怒るなよ。失業なんて珍しくない。明日からハローワーク行けばいいだけじゃんか。それに俺だけじゃないだろ！」

「うるさいっ！ボクは……ボクは……どうしてもお嬢様の執事でいなくちゃいけないんだっ！」

やばい。ちょっと言い過ぎたか。近衛泣きそうだ。といつかもはや涙が見えている。近衛の目には大量の涙を滲ませていた。

「大丈夫よ、スバル」

天使のような口調。

天使のような微笑み。

それは、聞いた者を安心させるような穏やかな口調だった。

「私がどうしてジローくんを拘束して大村くんをこの場に残らせたと思うの？ あなたが執事をやめないようにするためじゃない」

「……………」

……………気がつけば大村……いや誠時はヘッドホンをはずして教諭用に用意してある椅子に座っていた。

そんな大村に意識がいつていた俺は、涼月が隣に来ていたことを忘れていた。

「…っ！」

不吉な予感。
本能的な恐怖。
涼月が、馬乗りになるようにして俺の腰辺りに乗っていた。

「！」

一瞬…。ほんの一瞬 たじろいだ。
軽い。
思ったより軽い。
涼月奏の身体は思ったよりも軽かった。しかし、それを口にしないほうがいいだろう。

「どつかしたの？ジローくん」

「…いや…なんでもない」

長い髪をいじりながら、涼月は落ち着いていた。

対する俺は酸欠寸前の金魚みたいに口をパクつかせていた。というか呼吸することを忘れていた。

「スバルから聞いたわ。あなたが鼻血を出したとき、身体がどうとか言ってたって」

この女（涼月奏）いきなり痛いところを突いてきやがった。暑くもないのに全身から汗が噴き出してくる。

「ジローくん。あなたって、何か特殊な体質なのかしら？」

ひいつ。そんな声が出そうな誘導尋問だ…。心拍数がペースを上げる。

「…黙ってるつもり？」

涼月による臨時裁判所が開門。最高裁判官は涼月。傍聴が近衛と大村。被告人は俺。こうなったら黙秘権を使うしかないぜ。そう拘束されて動けない以上、無口になってピンチを乗り切るしか助かる方法がない！

「別にいいわよ。それなら……身体に直接訊くから」

「ひい…えっ？」

驚きと恐怖を感じている俺の腰の上で馬乗りしていた彼女は口元を歪めた。涼月の白い指が何かを握っていた。ナイフ。ナイフ。ナイフ。何回見てもナイフだった。そのナイフが俺のシャツを切り裂いていく。

「お、おい！ 何してんだよ」

「静かにして。間違っで内蔵を傷つけちゃうかもしれないでしょ」

「さらりと怖いこと言っな！」

はだけたシャツから見える肋骨の上を白い指が這っていく。細い指。冷ややかなその体温に、心拍数が跳ね上がる。

――ヤバイ。

身体の一点に血液が集まっていく感覚を感じた。

鼻の奥に熱い何かがある。

……ダメだ。我慢できない。

ぶしゅっ。

そんな、何かが弾け、噴き出すような音。

俺の視界の前には一色の色が飛び散っていた。

赤。赤。赤。

赤という赤はどこから噴き出していたのか。

鼻。俺の鼻から出てきた色だ。それを示していたのが……。鼻血。

案の定。俺は涼月に身体を触られただけで鼻血を噴き出していた。しかし、涼月に飛び散らないように手で抑えた。

「こ、このド変態っ！ お嬢様にまで欲情して鼻血を出すなんて…！」

隣のベッドから怒り狂った声が聞こえた。その声の主は近衛スバル。

正面には馬乗りしている涼月奏。その身体には少し飛び散ってしまった俺の鼻血がついてしまっている。

「ふふ……なるほど。面白いわね」

涼月は少し微笑みながら考えているようだ。
考え終えた涼月は目を細めてから、

「まさか、女の子に触れられただけで鼻血が出ちゃう身体なんてね」

「え？」と近衛が「は？」と大村が。二人の頭の上に見えないであろうクエスチョンマークが浮かんでいた。

知られてしまった。家族以外の誰にも言っていなかった秘密が、クラスメートに知られてしまったのである……。

「アレルギーかしら？それにしては聞いたことがない症状よね」

「いや、アレルギーなんかじゃないんだ。これは、後天的で人為的なものなんだよ……」

なあ、坂町朱美って知ってるか？ と俺……坂町近次郎は話を切り出した。

「知ってるわよ。ちょっと前まで、テレビとかによく出ていた人でしょう。確か……職業は……女子プロレスラー」

その通り。坂町朱美。『鮮血の女王』の異名を持ち数々のタイトルを獲得した女子プロレスラー。獲得したタイトルの数は数多く、それによって世間的にも有名になりテレビにも頻繁に出ていた。

そして、何を隠そう……。

「実は……あの人。坂町朱美は、俺の母親なんだ」

「……それは初耳ね」

少し驚いている涼月。

まあ、驚くだろうな。あの人の子どもなんだって知ってしまったら……。

「……けど、それと坂町（おまえ）の症状にどう関係してるん

だよ」

そこで、椅子に座っていた大村が聞いてきた。
そうだよな。一見なんの繋がりもないように見える……が、これが大変関係しているのだ。

「そ、その、なんて言うか……シバかれるんだ」

「「「は?」「」」

俺の言葉に、大村と近衛と涼月は三人揃ってポカンと口を開けていた。

「家の母親は格闘技とかそう言ったもんが大好きでさ。そりゃ勿論好きだから格闘家してるんだけどさ……それだけなら、まだいいんだ……さらに一つ年下の俺の妹も。俺はガキの頃からそんな家族の技の実験台や練習台やストレス発散として、シバかれて育ったんだよ……」

言っておきながらな心境だが……。

ああ、思い出すだけでも身の毛がよだつ。

一言で言うなら俺の家族内でのポジションは……サンドバック。

STF、チヨークスリーパー、逆十字、足首固め、ブレインバスター、フランケンシュタイナー、テキサススクローバーホールド、STO……などなど。この身に受けた技は夜空に浮かぶ満天の星の数より多い。

「『これはおまえを鍛えるためなんだ！』とか『愛の鞭！』とか『お兄ちゃん大好き！』とか『新技だ！』とか……そんなことを言われながら、俺は十年以上も毎日毎日母親と妹にシバかれ続けたんだ。その結果が、この症状なんだ」

女性恐怖症。

説明するならその言葉が一番妥当だろう。歪んだ家庭環境の影響で、俺は女という生物に触られるのが死ぬほど苦手になってしまったのだった……まあ一歩間違えば歪んだ家庭環境内で死んでいたけどな……。まあ、そのおかげとして身体が異常に強く頑丈になったけどさ。

「…なんで鼻血が出るんだ？」

近衛はゆっくりと聞いてきた。

「俺にもよくわかんないけど、たぶん癖になってるんだ。それに、鼻血を出せばそれ以上はシバかれずにすんだからな」

「…けど、そこは家族の優しさだな」

「…いや、違う。前に聞いたら部屋が汚れるからって言ってたよ」

「」「」「」

黙りこむ三人。ちょっとだけ不憫に思ってくれているらしい。ひよっとしたら涼月もいい奴なのかもしれない。
そんな涼月は…

「つまり、じつじつじつじつでしょ」

未だに俺の腰上に馬乗りしている涼月が口を開いた。

「あなたは、女の子に触れられるのが怖くて仕方ないチキン野郎なのね」

ぐさつと心臓に鋭利な刃物を突き立てられた気分だった。
なんてはつきり言いやがるんだ涼月。直球過ぎる。150キロ並みの直球だ。変化球じゃないと俺の心の木製バットが粉々になってしまう。

「ねえ、そつでしよう？ 坂町近次郎くん」

「!？」

こ、このタイミングで俺のフルネームを呼んだ？…… ま、ま
さか……涼月……気付いたのか？ 今まで誰も気が付かなかった、
俺の名前の秘密に………！

「どうかしたの？ ねえ黙ってないで何か言ってよ、坂町近次郎く
ん」

「……………」

「サカマチキンジローくん？」

「……………」

「サカマ、チキン、ジローくん？」

「……………」

「チキンくん？」

「うわあああああっ！」

その言葉に耐えきれず、俺は絶叫していた。
そんな俺とは対照的に口元に笑みを浮かべている涼月。

「どうしたの？ チキンくん。目からミネラルウォーターが出てるわよ」

「やめろ！ その名で俺を呼ぶなっ！」

…呪われてる。そうとしか思えない。チキンなんて忌々しい単語が自分の名前に組み込まれてるなんて……。

「サカマ、チキン、ジロー？」

「フルネームで呼ぶなっ！！！」

そう俺はフルネームで呼ばれることを嫌う。それは……この名前の秘密を知られないためである。

「ところで、ジローくん」

急に、涼月の雰囲気急変した。

天候までも急変した。まるで涼月と共鳴するように……。

「あなた、自分の恐怖症を治したいとは思わないの？」

「……………そりゃあ、俺だって治したい。治して、女の子と触れ合いたいよ」

この恐怖症【女性恐怖症】治したら迂闊に女の子に触っても鼻血なんか出さなくても済む。けど、治さなかったら鼻血のオンパレードだ。

「だったら、手伝ってあげましょつか？」

「えっ……？」

その言葉に俺の耳を疑った。巻き戻しがあるなら使いたいくらいに疑った。

「私たちが、あなたの恐怖症を治す手伝いをしてあげる。要するにあなたが……ジローくんが女の子なんか怖くないって思えるようになればいいのよ。その代わりに条件があるの………」

「条件？……」

「スバルが女の子だってことを、誰にも言わないで欲しいの………
そう、たとえ死んでもね」

……やっぱり耳おかしいのかな？ さつきから物騒な言葉しか聞いてないんだが……。
まあ言いたいことはわかる。つまりは交換条件ってわけだ。俺が近衛の秘密を死守する代わりに、涼月たちは俺の恐怖症を治す手伝いをする。そついうことが……。

「あなたが秘密を守れば、私たちが条件を破ってしまったことを父に知られることはないわ」

「……………めちゃくちや不正じゃないか」

「バレなければいいのよ。どう？ 私たちと協定を結ぶ？」

「協定っていうより共犯だぞ」

「ステキね。私は好きよ。こんな面白そうな共犯関係。 退屈しなさそつだもの」

「……………ちなみに……………その共犯関係をだ……………断ったり……………破ったらどうなるんだ？」

「そのときは スバルみたいに強硬策を執るしかないわね。一カ月後くらいに、富士の樹海で身元不明の死体が発見されることになるでしょうね」

……………やっぱり明日、耳鼻科に行こう。うん、行こう。絶対行こう。
にしても、しれっと怖いこと言うよな。

何が共犯関係だよ。そりゃちょっとは共犯関係かも知れないが思いつきり脅迫じゃないかよ。でも……………今の俺には……………共犯だろうが脅迫だろうが……………救いの道は……………ないだろう。

「わかった。おまえの話に協力するよ、涼月。……………けど、近衛はそれでいいのか？」

横の近衛に視線を向ける。さっきから俺のことを変態呼ばわりするコイツのことだ……………絶対に断るだろう。

しかし……………意外にも、考えている近衛。決心した顔をしてから……………。

「ボクは奏お嬢様の執事だ。お嬢様のご命令に従う。それに……………」

「それに?」

「いや…………なんでもない」

なぜか、何か言いたそうにしていたのをやめ、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

「じゃあ決まりね」

涼月はやけに楽しそうに笑っていた。何だ?もしかして、これから始まる共犯関係を想像してたのか? まったく怖い女だ。

「ところでジローくん。鼻血が出てからも触られ続けたらどうなるの?」

「え？…いや…たぶん耐えきれなくなつて失神するんじゃないか」

事実、俺は母さんと妹にシバかれ続けて失神してしまったことは数えられるくらいある。その後は何をされたかはわからないが、無事目覚めているからあまりひどいことはされてないと考えられる。

「けど、それがどう…」

と。

そこまで言つて俺の口は止まった。

そう涼月の白く細い指が、再び俺の肋骨に伸ばされていたため、俺は黙っていた。いや…違う。黙らされた。

「これは実験よ。今後の為にも、あなたの身体がどこまで耐えられるのか試さなくちゃ」

悪魔。

悪魔か。

いや魔王か？

悪魔のような微笑みをしている悪魔涼月（デビル涼月）。
ヤバイ…涼月。コイツ、明らかに弄んで面白がってやがる。

「や、やめろ！ そんなひゃあんっ！」

「ちよっと触っただけなのに可愛い声を出すのね」

白細くて長い指がゆっくりと肌の上を這いずり回っている。
…
…ダメだ。普通なら天国のようなシチュエーションだろうが、女性
恐怖症の俺にとってはただの拷問だ。視界はすでに闇落ち寸前。こ
のままじゃあの世へ慰安旅行に行くはめになる。そうなる前に、

「た、助けてくれ近衛！助けてくれ大村！」

掠れながらも精一杯な声を出し二人にSOSを出した。

「ボクは執事だぞ。もちろん手品師でもない。だからこの鎖からは抜け出せない」

しまった……。近衛も拘束されていたことを。なら……

「……………恐怖症を治すためだと思えば坂町」

……………くそっ！ヤバい！本当に失神する。

「あら、ジローくんったらこんな所に痣があるのね」

「ひゃあああやめえええ」

悲鳴が学園に響き渡っているはず。

……………ああ、今日から始まる生活が俺の日常になるんだよな。

徐々に遠のき闇に落ちていく意識。

その最中で、俺は神様に願った。

どうか……俺の貞操の無事を……と祈った。そうして……
意識が……お……ちて……いく。

第二話 秘密だぞ（後書き）

お久しぶりです！ 先日から夏バテ復帰しました。阿良々木 雅です。

最近夏バテ気味でして病院に行くと「熱中症ですね」と言われてしまいました……。一話目を投稿した直後だったので本当にお久しぶりですとしか言いようがないです。一話目から二話目にかけて遅れてしまったのを深くこの場でお詫び申し上げます。

さて、この【迷える執事と秘密の恋】略して『まよコイ！』もおかげさまで二話目に突入です！ 今回はアニメ『まよチキ！』一話目【エンド・オブ・アース】付近の内容になっております。僕はノート執筆ができるんですが……それを清書するのに時間がかかりました。本当に申し訳ないです。

ちなみに「大村 誠時」の編入テストの点数は平均9.5点の好成績という設定にしました。今回からオリ主を個人的に描いてみた瞬間……「やばい」の一言しか出なかつたです。機会があれば画像投稿をできたらいいなと思っております。

こうして、この「まよコイ！」の二話目を書けたのもひとえに読者の皆様のおかげです。心から深く感謝いたします。セイバーさんの要望を承け『涼月奏』も出演しました。

さてさて、『まよコイ！』とは関係ないのですがゲーム会社【B a s e s o n】様が10周年を迎えたのを記念して【真・恋姫十無双&あつぱれ！天下御免】のコラボレーション作品をお送りできればと考えております。主人公は四人くらいの男性キャラ予定。その中に……誠……は、入るのかは まだ秘密です。

ではでは、また皆様とお会いできることを願ひ祈りつつ、ちょっとアクセル全開で突っ走って行きたいと思っておりますので、どうぞよろしく願ひします。

第三話 好きな人ができちゃった(前書き)

朝に出会った 皆さんには
おはようございます

昼に出会った 皆さんには
こんにちは

夜に出会った 皆さんには
こんばんは

『まよチキ!』タグを利用している作者の皆様、読者の皆様。どうも
阿良々木 雅です。

アニメ『まよチキ!』第七話目の水着姿のスバルを見てテンション
上がっていました。

にして……あんな穴、どうやって掘ったんだよ!?

今回も文字数が多いです

アニメ『大好きになっちゃった』と同じところになっております。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第三話目を楽しんでください。

第三話 好きな人ができちゃった

信じられない出来事を知ってしまった日の夜もいつかは明ける。そして、どんなに明日が嫌でも明日という日の朝はやってくる。

そんなわけで俺は枕元に置いてある携帯電話を手にとり液晶画面で現在時刻を確認した。えー……現在時刻は朝の6時23分28秒。いつもベッドから抜け出す時間より少し早いが、まあいいだろう。

ちなみに普段の俺の起床時間は朝6時30分である。そんなに早く目覚める（覚醒／起きる）理由は……特に無い。『そこは何かあるだろう！』って大地に突っ込まれたこともあるから突っ込まないでくれると助かる。

（……また、俺は誰に説明してんだ……アホか）

そんな説明をしてしまったアホな俺は二階の自室から一階に向かった。

さて、まだ時間があるからシャワーでも浴びるかな。

バスタオルを持って浴室へと向かう。また大地に言われたんだが『朝シャワーとか寝汗がすごいのか？』って言われたことがあるのだが、そんなに寝汗がひどいわけじゃないから。そこも突っ込まないでくれると説明しなくて済む。

そういえば俺には何も言われなかったな“あの出来事”について……。
あの出来事とは、そう涼月奏の執事が男装少女だった。その秘密を死守するために交換条件を出されるかと思っただけだが、何もなかった……。

だが、それでいい。
何も無い方がいいに決まってる。

そんな考えをしている最中に、浴室へと続く脱衣所に辿り着く。辿り着いた俺は服を脱ぎ捨て浴室に入りシャワーを浴びていた。

濡れた髪と肌をバスタオルで拭きながら欠伸をしている。さっきシャワーを浴び終えた俺は携帯電話の液晶画面を見ていると……。

ピンポンと。

玄関のインターホンが鳴った。

誰かが訪ねて来たのかな？大地にしては早過ぎないか？中学時代のアイツは「寝坊の王様」っていう、あだ名があるくらい朝は苦手だったはず。現在は弟に起こしてもらってやっと早起きができるらしい。

そんなことを考えながら急いで服を着て玄関まで行き、カギを開ける。

現在着ている服だが学生服姿という学生らしい格好をしている。整髪剤などはつけてないが見ず知らずの人にそこまで気にする必要もないか。

「…………おはよう、大村」

「おはよう、大村くん」

だが…………。
開けた扉（ドア）の向こう。そこにいたのは何とも予想外の人物だった…………。

「…………近衛？涼月？なんで俺の家に？」

綺麗な職人技で造られた人形みたいな身体に、それこそアンティークドール並みの端正な顔立ち。明るい髪を束ねた髪形、透き通った瞳に澄み切って聞こえるアルトボイス。学園の生徒たちから【スバル様】と呼ばれるほどの美少年。（（美少女））
近衛スバル。

抜群のプロポーションと美貌を持つ少女。クール&ビューティー。頭脳明晰かつ文武両道というほどパーフェクトな成績を持つ……非の打ち所のない優等生。学園の男子にとってのアイドル的存在。美少女。

涼月奏。

今現在……俺の家の玄関の前にいるのは涼月奏とそんな彼女に仕える近衛スバルだった。

まさか……俺を監視するために来たとか言うんじゃないよな？

状況がわからず固まっていた俺。なぜか微笑んでいた涼月。オロオロと目を泳がせている近衛。

沈黙。静寂。無音。

まるで世界の針が止まったかのような沈黙が玄関を支配している。そんな中……

「……いい、一緒に登校してくれ！」

静寂を切り裂いたのは近衛の方だった。

なッ……………い、一緒だと。

今の発言が恥ずかしかったのか、顔が赤くなっていた近衛スバル。

……………そんな一言から今日という日は始まったのだった。

x

「やあやあ、誠時。どうした？朝から不機嫌気味な顔して」

教室に入って席につくなり、幼なじみの大地が話しかけてきた。

「……………不機嫌気味か」

そう呟いた俺の後ろから声をかけてくる人物がいた

「久しぶりだな誠時」

後ろから軽く俺の肩を叩く少年が一人。

柏木友哉。俺とは中学時代からずっと同じクラスメイトだったほどの腐れ縁でもある。平均的な身長をしていて髪色は金髪で俺と同じところにピアスをつけている。

同じクラスだったみたいだが柏木だけ一週間弱休んでいたらしい。

「確かに大地の言うとおり不機嫌気味だな」

「だろ。なんか嫌なことでもあったのか？」

「……………なんでもない」

一限目の数学の教科書を机の上に置き終えると、

「ふむふむ。なるほど。ところで……………誠時くん」

大地は耳打ちするように顔を近づけて、

「誠時くん。キミ今朝スバル様や涼月奏と登校してきたってホントなのか？」

近くでガタイがいい奴に聞かれていたジローも ぶはっと吹き出しそうになっていた。俺も吹き出しかけていた。だが、なぜそれを知っているんだ？

「……その反応。うわっ、マジですか。どうして一般生徒と学園のアイドルと王子様が一緒に登校してんだよ。なんか特殊な関係だったりとか？」

大正解。ホント大地の勘は怖いくらいに当たるんだよな。

「登校の途中で偶然会っただけだっただけの」

「ですよ。あの学園のアイドル様が一般生徒と待ち合わせなんか

するわけないか」

そう言った大地は俺の机の上に腰を下ろす。

すると大地は後ろの方に顔を向けた。

俺と友哉はつられて後ろを見ると、そこにはスバル様？こと近衛スバルと学園のアイドルこと涼月奏の姿。大人しく席に座っている横に突っ立っている執事。

涼月といるときの近衛は活活とした顔をしているが、一人のときは基本的仏頂面をしている。

「なんか近衛って暗いよな。クラスのヤツにも愛想悪いからな。いくら顔と成績が良くても、あれじゃ男子は誰も近づかねえよ。女子は寄ってくるけど、そいつらにも冷たいしな」

「……………そうだな」

一目で判るくらいに、近衛はクラスで孤立していた。

一緒のクラスメートの涼月が他の女子と仲が良いだけに余計そう見えているのかもしれない。涼月と二人でいるとき以外、近衛はずっと独りで窓の外を眺めている。

孤独な王子様。

学園での近衛はそんな感じである。

「そついえば、どうして俺が近衛たちと登校したのを知ってるんだ？」

質問した俺の目の前に出されたのは……携帯電話。白のスライド型携帯電話……。

「俺たちにはケータイっていう世界共通の情報ツールがあるじゃん。あのスバル様と涼月奏が一般生徒と登校してきたなんて情報は新型インフルエンザなみの勢いで伝わってるんだぜ。噂じゃ『S4』はもう動き出しているらしい」

「『S4』ってなんだよ？」

「知らないのか？ならば説明してやる。『Shooting Star Subaru Sama』。ほら頭文字にSが4つあるだろ。この浪嵐学園で最大勢力を誇る近衛スバルの地下ファンクラブだ。学園の女子の五割か六割が入ってるって話だ」

「……………動き出してるってのはどっいつことだよ」

「ふむ。そんなの決まってるんだろ。誠時くん。キミとスバル様の同伴登校の真相を突き止めるためだろう。気を付けるよ。その内おまえのところにも刺客がやってくるはずだ」

刺客か……。うーむ刺客ねー。天井。空。壁。至る所から「参上！！」ってやってくるのかな？

「だが本当に気をつけるよ。『S4』の中にはすでに誠時、おまえと近衛の仲を誤解している狂信的なファンがいるはずだからな。後おまえ自身のファンクラブからも迫られるはずだ。で、それも含めて夜道には気を付ける。それとスバル様にもな」

そこまで言っただけで大地は友哉を連れて自分たちの席に戻った。他の連中も席に戻っていった。教室の扉が開いて一限目の教師が入ってくる。何も問題無く今日という俺たちの学園生活は始まるようだ。あんな忠告を受けのに、どこかで近衛の側に居たいと思っただけなのは何なんだ？

そんなことを考えながら、俺は数学のノートを開きシャープペンシルを指でまわす。

教師の長い長い念仏のような授業が始まっていた。

そんな数学の授業中……隣の人物から机越しに一枚の紙切れが渡される。
そう近衛スバルからである。その紙切れを見た俺は自身の目を疑うほどの内容だった。

x

「一緒に昼飯食おうぜー」

そう大地に誘われた。

四限目の授業が終わりを告げたためだ。

つまり……。

昼休みというわけだ。

と言われても今日俺は昼飯を持ってきていない。

「忘れたなら……購買部に行けば？」

「……………そうだな」

本当は弁当を持ってこれるんだけど、ただメンドクサイから持ってきてないのである。

「……………ふぁ」

欠伸をしながら教室を出て廊下を歩く。
購買部に到着すると見知った顔がそこに居た。
そう見知った顔とは……。

坂町近次郎。

「……ジロー」

「……誠時？」

坂町は生き別れた息子と再会したような表情をしていた。

俺と坂町は購買部の食品を見つめていた。

ヤキソバパンなどの種類が多いパン類。

ラーメンなどのカップめん系や惣菜なども揃っている。

真剣な表情でキムチサンドと睨めっこしている坂町。

俺もパンを見るか……。なにに？本日のオススメは……。餃子サンド？おいしいのか？餃子サンド……。

「ジロー。先に教室に戻るけどいいか？」

「ああ。もうちょっとコイツを買つか決めるから」

そう言った坂町が見ていたのは「キムチサンド」だった。坂町
ってキムチ好きなのかな？

そんなことを考えながらコロツケパンとヤキソバパンといちご牛
乳を購入。

買い物を終え、教室へと続く廊下を歩く。

教室まであと少しといった距離で俺は歩みを止める。

このタイミングを狙っていたかのように一人の女子生徒？が消火
器を持って近づいてくる。

女子生徒は……持っていた消火器を振り上げた。

だが……。

突然、黒板消しが飛んできた。それはまるで教師がチョークを投
げるかのように。

一瞬の出来事だった。

秒速の世界と言ってしまうてもいいくらいに。 頭部に黒板消し
が当たった女子生徒【S4】は悲鳴もなく倒れ込んだ。

「ご安心ください。我々『スバル様を温かい眼差しで見守る会』撃
退いたしました」

制服の右肩についている勲章のような布を見せていた。
どうやら『見守る会』は実在しているようだ。

「で、何なんだよ。その会」

「『S4』から分裂してできたのです。思考の違いからS4とは水面下で抗争中なんです」

黒板消しを拾いメガネを触りながら、

「それで……。あの……。教えていただきたいことが……。どちらが攻めで、どちらが受けなのかだけを」

腐女子か……。

俺と近衛。坂町と近衛のBLする同人誌の制作案まで出ていると聞いた噂は聞いていた。

どこが【温かい眼差し】だよ。【生温かすぎる】だろ。

さっきの内容を整理すると【S4】と【見守る会】この二つの派閥による冷戦状態になっているみたいだ。どちらも近衛の過激的なファンなんだな。

面倒な事に巻き込まれなきゃいいけど……。

「……………はあ」

溜め息を吐き出していると

「あら溜め息？ なかなか大変ね大村くん」

綺麗に靡く黒髪を揺らしながら、あっさりと言ってくる女子生徒。涼月奏だ。俺を尾行しているのか待ち伏せしていたのか。でも、よくこの場所を通るってわかったな。

「……………まあまあ大変だな」

「お詫びにコレをあげるわ」

「……………？ なんだよコレ」

渡された小さな紙に描かれている絵を凝視する。

これは……………

チケット？ 仮にそうだったとしても……何のチケットだろ。

「なあ、一つ訊きたいんだが」

「なに？」

「この……チケットって何？」

「執事と羊をかけたの。その執事券を使えば、あなたは一回だけスバルに命令できるわ」

「……命令か」

「まあ、使いたくなかったら使わなくてもいいわ。それは私からの些細なお礼よ」

涼月はその場で美しく優雅にお辞儀した。さすがだな。どんな仕事も草も様になる奴だな。それでこそ学園のアイドルなのかもしれない

な。

それは……それとして……。早く教室戻らないと昼休み終わってしまっじゃないかよ！

「……じゃあ、俺は戻るよ」

そう涼月に言い残し廊下を走っていく俺。

「ふふ。じゃあ、また放課後にね」

放課後？

……おっと。

そんなことを考えてる場合じゃないな。

この券をどうするかも考えながら、俺は自席に着き深く溜め息をついた。

x

「……どうしてゲーセンなんだ？」

俺は携帯電話を持ちながら、電話向こうにいる涼月に訪ねた。

『初めてのデートなんだからこれくらいがちょうど良いと思ったのよ』

美しく流れ出す音声。なんか相手を爆破する薬とかねえかな。知ってるヤツがいたら大至急教えてくれねえかな。俺の平和のためにこのお嬢様を葬らねば。

『ジローくん。あなたの女性恐怖を治すには普通の女の子に慣れるのが一番いいと思って』

だから無理矢理デートするってわけね。

今現在俺と大村と近衛がいるのは学園がある街のとなり街にあるゲームセンター前である。

まあさすがに学園付近のゲーセンに行く度胸はない。こんなところを学園の誰か特に【S4】に見られたら最悪なことになるのも不思議じゃないよな。

そう、あのスバル様とデートするなんて。

まったく、近衛もよくここまでするよな。主の涼月の命令とは言え、俺なんかとデートするなんて。昨日はあんなことがあったのに

……なんかあったのかな？

「で、おまえは今どこにいるんだよ」

電話の向こうにいる涼月に訊いた。俺がここに来たときには大村と近衛しかいなかったからだ。（なぜかでかいスポーツバッグを肩から下げている近衛スバル）

『近くの漫画喫茶で漫画を読んでるわ』

「優雅な身分っすね」

『ジローくん。スバルに代わって』

言われた通り近衛にケータイを渡した。

『そろそろ始めるわよ。じゃ脱ぎなさい、スバル』

「わかりました、お嬢様」

「ちょっと待てええええっ！」

身を乗り出しながら全力でツツコミを入れていた。勿論、周囲の視線が突き刺さる。

初っ端から飛ばしすぎだろ。こんな人が多いところで脱げっ……なんて危険で危ない……ん？危険も危ないも同じだな。まあそんな危ないことを思いつくんだけ涼月のヤツ。頭のネジが10本ぐらい抜け落ちてるんじゃないのか。

『今ここで（ゲーセン前）とは言っていないわ』

「……着替えてきます」

そう言った近衛はゲーセンの中に消えて行っただ。

ゲーセン内へと消えて行く前、近衛が投げ返してくれた。

まったく人のケータイを投げやがって、もし壊れたらどうしてくれるんだ。

まあ俺も人のことを言えないよな。
俺は目覚まし時計を五個もご臨終させてしまっている。

『ジローくん。びっくりして倒れないでね』

「はい？」

意味がわからなかった。

この瞬間は……。

ちなみに大村は近くにある楽器屋でギターを見ていた。

待つこと数分、俺は涼月が言った言葉の意味を瞬時に理解した。
私立浪風学園の女子の制服に着替えた近衛が、ゲーセンから出てきたのだ。

「……………」

やばい……。

確かにこれはヤバい……。

相当な破壊力だぜ……。

め、めちやくちやカワイイ……。
すげーカワイイ……。

制服のスカートから覗くほっそりとした足。ニーソックスを穿くことでその脚線美がより際立っている。髪をほどいてリボンまでしている。かなり女の子っぽい。いや近衛は女の子なんだけどね。この浪嵐学園の制服を着るために生まれてきたといっても過言じゃない。

『どうやらスバルが戻ってきたみたいね。ジローくん大丈夫？まだ意識はあるかしら？』

「ああ……なんとかな」

そうか。あのスポーツバッグはこの為だったのか。わざわざ着替えを持ってきていたとは……恐れ入ったよ涼月さん。

「……なんかさ……胸まで大きくなってる気がするんですけど……
……気のせいですかね？」

近くにいる近衛に聞こえないようにコソコソ言った。

『サラシよ。スバルは普段サラシで胸を隠しているの。それに今は

パット入りのブラをしているはずよ』

「……………そうだったのか」

『昨日スバルが言っていたように、サラシをするのを忘れていたそうよ。だから、あなたが昨日理科室で触ったのは……………』

「待て。それ以上はやめよう涼月」

昨日の記憶と理性が脳内で大激戦。まるで壇ノ浦の合戦だ。うーん関ヶ原の合戦でもいいような。とにかく頑張れ理性。おまえ（理性）が負けたら俺は人の道を踏み外してしまう。

だから、頑張れ理性！

『さあ、それじゃミッションスタート。あなたと大村くんはその姿のスバルと今からゲームセンターでデートするの。何か起きたら連絡してね』

「ちよ、ちよっと待てよ！ 電話を切る気かよ！」

今の近衛と一緒にいるのはヤバい。着替えた近衛はどこからどう見ても女の子にしか見えない。っていうか実際女の子だ。これじゃ慣れるどころかゲームセンターが真っ赤な血の色に染まるぞ……………

『頑張つてね。ジローくん』

ブツッと電話が切れた。畜生。悪魔涼月【デビル涼月】め。俺よ
り漫画喫茶を優先しやがったぞ。
するといつの間にか大村が戻っていた。

「…で、どつするんだ？」

「どつするって…………とりあえずゲーセンに入らないといけないな」

そんなことを話し合っていると……

「なあ……大村…坂町……これ……変じゃないかな？」

やけに短いスカートを指でつまみながら、近衛が訊いてきた。

「……似合ってるよ近衛」

「あ、ああ、すげえ似合ってる」

その証拠に周囲の目が集まり始めている。ホント学園付近じゃなくてよかったよ。

「そ、そうかな？ 実はこの制服…… 一度は着てみたいって思ってたんだ」

ひらひらとスカートを揺らしながら、近衛は嬉しそうな表情をしていた。

ずっと女の子の格好がしたかったのかな。男として暮らしてちゃ女の子の格好をする機会なんてないだろうし。

「さあ、行くぞ」

ゲーセンの入り口へと駆けて行く近衛スバル。俺たちもそれを追ってゲーセンへと入る……………。

「……………これはなんだ？」

入って早々、近衛の視線はクレインゲームに釘付けになっていた。……………？いやナイナイ。うーん、もしかしてゲーセンすら初めてなのかな？

そんな近衛を見ていた大村は、

「UFOキャッチャーか。お金を入れて中身の景品を上手に取るゲームだ」

「…へえー」

説明したがどうも聞いていないみたいだ。近衛はドレスなどに憧

れる少女のようにガラスケースにべたつとへばりついていた。現在はUFOキャッチャーのガラスケースにへばりついている。

俺たちは、そんなに気になるのか？と思って覗くと『沈黙ヒツジ』というヌイグルミがガラスケースの中で群れをなしていた。

これは……大丈夫なのか。

デザインはかわいくデフォルメされた羊のヌイグルミなんだが……なぜか口元が赤い血が垂れているヤツもちらほらいた。なんとなくグロ映画に出てくる博士的なものを連想させてしまう。好物はだいたい人間とかだもんな。

「……………かわいいな……………」

かなり気に入ったみたいだな。意外に少女趣味なのかもな。若干センスがおかしいけど。

あまりにも欲しそうな瞳でガラスケースを見ていた近衛に「欲しいか？」と大村は訊いていた。近衛はこくこくと頷いた。久し振りにだったのか大村は千二百円かかって、なんとか『沈黙ヒツジ』をゲットすることに成功したようだ。

「ほら……………沈黙ヒツジだぞ」

大村は『沈黙ヒツジ』なるヌイグルミを近衛に渡した。

「うわぁ……かわいいー……」

仏頂面をしていたスバル様も、あんな笑顔ができるんだな。に
しても……

可愛いな……

俺も何かしようかな……

そんなことを考えながらポケットに手を突っ込んだ。

「ん？………」

紙切れ？

ポケットから一枚のチケットを取り出す。羊の絵？もしか、例の
執事券ではないか。でも本当に使えるのかな？これ【執事券】。

「なあ、近衛。これって何か知ってるか？執事券らしいんだけど」

幸せそうにぎゅっとヌイグルミ【沈黙ヒツジ】を抱えていた近衛
に執事券を見せると……。幸せそうな表情が一気に凍りついた。

「ど、どうして坂町。おまえがそれを持っている？」

「涼月がくれたんだよ。それより、これを使えばおまえが俺の命令を聞くて本当なのか？」

「……………」

沈黙……。

凍りついた表情の儘黙り込む執事。

マジなのか？……………。

どうしよう。涼月がくれたんだ。せつかくだし使ってみるか。あ、ちなみに執事券を貰ったのは購買部の帰りに涼月に出会い『執事券』をいただいたのである。

えーっと、何々？チケットに書いてある説明だと……………『破った瞬間から主従契約が成立します』か。

ビリビリッと執事を破る。

すると執事は不器用ながらも笑みを浮かべて、

「……………な、何か御用でしょうか？ご主人様」

「……………」

「ジロー。おまえ“コレ”って」

大村は、破いた執事券を拾い上げた。

……………。

いやー、その、あー、なんて言えばいいんでしょうかねー！。

執事券を使ってしまいましたよ。

ヤバイ……………。

破壊力が強い過ぎる。女の子に『ご主人様』とか呼ばれてしまった。今の時代メイド喫茶に行かない限り『ご主人様』なんて呼んでももらえないだろう。このままじゃいけない道に踏み出してしまいそうだ。

「何でもお申し付けください。ご主人様」

「……………っ！…な、何でもって」

ふるふると脛が震えている。よっぽど涼月奏以外の命令をきくのが苦手なようだ。

涼月が言っていた台詞が思い浮かぶ『上半身だけ裸にして胸にハチミツをすりこませながら……………』……………っ！

俺は脳内で叫んだ。

(俺はそんな変態じゃないっ！)

ふう……………。

あんまり無茶な要求をするのは嫌だし……………何か軽い命令にしてくか。何がいいかな？

あ……………『沈黙ヒツジ』

これでいいか……………。

「メエ〜って鳴いてみて」

「「は？」」

近衛と大村は、今、下した命令が信じられないといった感じだった。

近衛なんか訊き返してくるくらいだ。

「いや、だからメエ〜って鳴いてみて。簡単だろ？」

「……………っ」

しばしの沈黙のあと、執事くんは瞳に涙を溜めながら、口唇（くちびる）（くちびる）を震わせながら、

「……………メ、メエ〜〜っ」

と、狼に襲われた哀れな小さな羊のように一声鳴いた。

……………。

(なぜだろう、人としてやってはいけないことをしてしまった気がする……………。)

大村は呆れた表情をしていた。それに近衛は羊【沈黙ヒツジ】が好きでも羊のマネをするのはあまり好きじゃなかったようだ。ん？なんであって…………敵討ちに出会ったかのように睨みつけている…………。

「……………ご主人様」

「……………っ！」

た、大変だ！

満面の笑顔なのに、目だけ、目だけが全く笑ってない！
もはや死んだ魚のような目をしている！
怖い……………

「ご主人様。頭にホコリが付いてますよ」

「……………!? や、やめろ近衛！ ホコリくらい自分で取れるからっ！」

ずいっと俺と近衛の距離が縮まる。ぞわぞわと鳥肌が立つ。そしてアップになる近衛の顔。近い……。

「どうかしたんですかご主人様。そんなにガタガタ震えて。寒いんですか？ なんならボクが暖めて差し上げましょうか？」

ああ……………。

ダメだ……………。

鼻の奥がツンとしてきた。

血液が集まっていく感覚。

鼻血が噴き出す前兆だな、と俺は鼻を触りながら思った。

そう……………

「あつ……………」大村は何かを見つけたかのような声を出す。出した瞬間……………

「ぎゃはっ!？」

衝撃が…………俺の身体を襲う。

ドロップキック。

突如、ミサイルのごとき勢いで飛んできたその一撃【ドロップキック】に、俺 坂町近次郎の身体は放物線を描くかのようにふっ飛んでいた。

不意打ちに驚きながらも、華麗に受身を取ろうとゲーセンの床をゴロゴロ転がる。

回る視界……………。

……………なんとか立ち上がり、ずれた眼鏡を直しながら俺の側頭部に見事なドロップキックをかましたヤツを見る。

ショートカットの似合う女の子は、ドロップキックから鮮やかに着地していた。

坂町紅羽。

そう、俺の妹の登場だった。

「く、紅羽！？ おまえ、こんなところで何してやがる！」

くそっ……………

痛ッ……………

ギシギシ痛い首を押さえながら叫ぶ。常人だったら問題なく骨が折れる以上の一撃【ドロップキック】だぞ。

「それはこっちの台詞だよ、兄さん……………!!」

妹の声は怒りに震えていた。 ヤバいな……………

「……………に、兄さんが男の人と付き合ってるなんて噂を聞いてさ、朝からずっとなんか聞いてきたんだよ」

「……尾行してきたのか!？」

「そしたら……まさか、あなたにこんな秘密があったなんて!」

紅羽の言葉に　びくっ　と近衛の身体が震えた。

……ヤバイ。

今の近衛はどっからどう見ても“女の子”だ。これじゃ誰が見ても気付いてしまう。学園の王子様　近衛スバルが、実は女の子だったという真実に……!!

「まさか……先輩が女装趣味のある変態さんだったなんてッ!」

「「「は?」「」」

俺と大村と近衛、三人分の気の抜けた声が聞こえた。

……。

助かったー!

ホント。

俺の妹がバカでよかった。

「ちがっ……」

「全部……………見てたんだよ。兄さんが女装した近衛先輩にヌイグルミをプレゼントしたり、身体寄せ合ったりして……………極めつけは……………男の人同士でキスしようとしてたでしょっ！」

……………。

紅羽は瞳に涙を溜めていた。昔から紅羽は思い込みが激しかった。経験上わかるのだが、こうなってしまうた妹は誰の言葉にも耳を傾けずに……………暴走する。

「家に兄を迎えに来たときからおかしいとは思ってたんです！あなたが兄さんをたぶらかしたんですねっ！」

「紅羽……………」

少し息を乱しながら、俺の呼びかけを遮る。

「この泥棒猫っ！あたしの兄さんを返せええーっ！」

脳内時限爆弾の時間が『0』になったのか、爆発する妹。

咆哮と同時に、その小さな身体が近衛めがけて走り出す。

紅羽は左拳で殴り込んだが……………その一撃を軽やかな動きでかわた。勢いよく突っ込んだ紅羽は一瞬だけ体勢を立て直すのが遅れて

しまった。

その一瞬を近衛スバルは見逃さなかった。

強烈な蹴り……。

ミドルキック。

中腰から立ち上がるうとしていた紅羽の顔面に、強烈な中段蹴りを放っていた。

「えーっ」

俺は驚いた。

あの紅羽が負けた!?

どうにか顔を少し反らして防御していた。しかし、喰らった中段蹴りの威力に紅羽の軽い身体は派手に後ろにふっ飛んだ。一瞬……俺の意識が止まっていた。

「……っ！ お、おい！紅羽!？」

ゲーセンの床に倒れている妹に駆け寄る。

顔が無事なところを見ると、中段蹴りの威力で動けないのではなく、いとも簡単に負けたことがショックだったらしい。

「な、なに、これ……」

瞳には大粒の涙を溜めていた。

「こんな……こんな反則よっ!」

「うわあああっ」と叫びながら、紅羽はゲーセンから走り去っていったのである。

俺と大村と近衛はそれをただ呆然と見送ることしかできなかった。すると……。

「意外な結末ね」

UFOキャッチャーの影から姿を現した女の子は艶やかな黒髪を靡かせて、こちらに歩み寄ってきた。

そう涼月奏だった。

「涼月……おまえ見てたのか?」

「こんな面白いこと見逃すはずないでしょ」

平然としゃがって。誰のせいでこんなことになったと思ってんだ。

「すまない、あんなに強く蹴るつもりは……………」

まだ女の子の姿をしている近衛はシユンとうな垂れていた。

「気にするな。ああでもしなきゃ紅羽は止まらなかった」

実際、近衛が護身術を習ってなかったらヤバかったであろう。じやなきゃ今頃ゲーセンは血まみれになっていたかもしれないからな。紅羽ならそれくらいやりそうだ。

「じゃあ。また明日学園でな」

俺は三人より先にゲーセンから出た。

……………きつと今頃、熊五郎は紅羽のサンドバッグになってるんだろっつな。

容赦なく紅羽にシバかれてポロポロになり、何回も燃えるゴミと一緒に捨てられそうになった熊五郎を、俺は幾度となく修理してきた。

俺の感覚的にはヌイグルミというより戦友に近い。そんな存在だ。俺と熊五郎は、二人三脚で坂町家の修羅場を潜り抜けてきたのである。

そんなことを考えていると……何時の間にか我が家の前まで帰ってきていた。

玄関のカギを開ける。

はぁー、今日あったことを上手く説明しなければ。しかし、どうやって説明したらいいのやら。

「ただいまー」

溜め息を吐き出しながら扉を開けると、家の中は真っ暗だった。

……おかしいな。もうとっくに紅羽が帰ってるはずなのに。そう思いながら、リビングと台所の電気を点けると……。

クマのヌイグルミが惨殺されていた。

「ひいっ！」

俺は思わず悲鳴を上げた。

台所の壁にあるのはスタスタに引き裂かれ包丁によって刺されていたヌイグルミの惨殺死体。

熊五郎だ。

ヤバい。今現在の紅羽は日本株式市場なみに荒れているみたいだ。この凄惨な現場がそれを物語っている。けれど修復はできる。俺の裁縫技術によって。俺は自室に向かった。

「にしても、紅羽のヤツ。相当ショックだったのかな？」

そんなことを呟きながら熊五郎の修復に集中することにした。

x

四限目の授業の終わりを告げるチャイムが、私立浪嵐学園の校舎に鳴り響いた。

クラス一同立ち上がり、教師に挨拶をした。

教師が出ていくと、教室の空気は昼休みになっている。

「……終わったか」

俺 大村誠時は、机の上に広げてあった現国の教科書をパタンと閉じた。それから、何気なく窓の外を眺める。本日の天気は快晴。見渡す限り雲一つない空は、なかなか爽快な眺めだ。

そんな事を、しみじみと思っていたら、

「あの……大村。一緒にお昼を……」

声をかけられ、俺は首を動かした。

すぐ近くに近衛スバルが立っていた。後ろには坂町近次郎もいた。すでに、教室がどよめいていた。それはそうだろう。涼月奏以外、誰もそばに近寄らせなかったあのスバル様が、俺と坂町なんかを昼食に誘ったのだ。

「おい……マジかよ……あの近衛が一般生徒を昼飯に誘ってるぜ」

「あの三人、今朝も一緒に登校してきたらしいよ……」

ヒソヒソとクラスメイトたちが囁いているのが聞こえる。

「まさか……ジローの噂ってマジだったのか……」

近くにいた黒瀬は、自分の息子がグレてショックを受けている母親のような眼差しで坂町を見ていた。

「ち、違う！ これは誤解で……」

「何が誤解だ。ほら、行くぞ。……大村も……行くぞ」

必死に弁解しようとしていた坂町を近衛がぐいぐいと引っ張っていく。さらに慌ただしくなる教室内。その中で、大地と友哉だけは『ガンバー』と声援してくれた。まあ涼月は楽しそうに微笑んでいた。

「……で、どこで食べるんだ？ 近衛」

教室を出て廊下を歩くと、周りの視線が容赦なく突き刺さる。

「とりあえず、人気のない場所だ。ここの周りが五月蠅いんじゃない着けない」

俺たちは逃避行中の犯人か……。はぁ……。溜め息を吐き出したいよ。

「勘違いするなよ。別に……おまえたちと一緒にお昼を食べたかったわけじゃない。これも監視の一環だ。ボクの見てないところでおまえたちが何をするかわからないからな」

そんなに心配なのか。なんか扱いが雑だな。

「……わかったよ。じゃあ屋上に行こうぜ。あそこなら人はいないからな」

一応、従うことにする。どうせならさっさと済ませたい。弁当を作るのが面倒くさく持ってこない。なので購買部に寄る。勿論、近衛と坂町も一緒だ。

「うー……」

真剣な表情でコッペパンと睨めっこする近衛。坂町は、今日のオススメのパンを購入していた。えーっと今日のオススメは……『カレーコロッケパン』のようだ。

俺もパンを見るか……まだ近衛は睨めっこしている。そんな姿

を見ているとほっとけなくなるじゃないかよ。

「近衛。無難にヤキソバパンとかカレーパンとかチョココロネとかを食べたほうがいいぞ」

と言いつつチョココロネとカレーパンとヤキソバパンとコロツケパンとツナマヨサンドと串カツといちご牛乳を購入。前にも説明したと思うが生活費などの心配は一切無い。私物などは去年バイトして貯めていた貯金などで賄っている。

「ヤキソバパンとチョココロネ……それからカレーパンとコロツケパン、あと……いちご牛乳も」

近衛は山のようにパンなどを買い漁っていた。購買のおばちゃんも目を丸くして驚きを隠せないようだ。

買い物を終え、屋上へと続く階段を上る。

ホントは立ち入り禁止なんだけど人気のない場所といったところくらいしか思いつかないもんな。

屋上に入出入する扉には鍵がかかっていなかった。ぎいっと扉を開けた瞬間、暖かい日差しと気持ちのいい風が心地よく吹いている。

ふう……。いいな。屋上だと尚 景色が爽快に見えるし、人気

もない。ああ、いい場所見つけてしまったな。

屋上の隅っこにあるベンチの右端に腰掛ける。さてと、昼飯昼飯。坂町は左端に腰掛ける。俺と坂町は購買部で購入したパンの包みを開けていると、

「……………」

近衛が、戸惑うように目を泳がせながら立ち竦んでいた。なぜか表情もふらふらと落ち着かない。

「近衛…どうした？ 早く座って昼飯食べようぜ」

「……………」

「……………近衛？」

「うつ……………。わかった。じゃあ、座るぞ……………」

おずおずと近衛は俺（誠時）の隣に腰掛けて無言でパンを食べ始めた。大地たちの言うとおり無愛想だな。まるで警戒心が強い野良猫みたいな感じだな。

「そっいゃ、涼月は？」

お互い無言じゃ気まずいと思った坂町が話し掛けた。
少しの沈黙……

「近衛。今は喋る時間だぜ。ダベりながら食べたほうが楽しいぞ」

少なくとも俺は今までそうだった。会話のない食事とかは家だけで充分だ。

「坂町や大村は いつも誰かところやって食べてるのか？」

「ああ。黒瀬とかな。あいつとは中学からずっと一緒だったし」

「……仲村や柏木とかな。アイツらとは中学からずっと一緒のクラスメイトだったからな」

「中学校か。ボクは行ってないからよくわからないな」

……???

俺と坂町の頭上にはきつと『?』マークが浮かんでいるだろう。

「ボクもお嬢様も高校からだ。名前だけ入学して、後は家庭教師が
ついて勉強したんだ」

……。

涼月の実家の決まりか。

けっこう大変だったんだな。

「だから、おまえたちみたいに友達とお昼を食べたことはないんだ」

近衛はらしくない弱々しい声で呟いた。やっぱり無理だわ。コイツの側に居たい。大地悪いな……助言（アドバイス）してくれ
たのに……。

はぐはぐとチヨココロネをかじる近衛の頭を ポンポンと優しく
触れる。

「え？……」

近衛はびっくりしたのか目を丸くしている。

「じゃあ、まずは名前で呼ぶことから始めようぜ。近衛はまだ俺の
こと名前で呼んでないだろ？だからさ 誠時でいい」

「俺のことは ジローでいい」

考えてみれば、近衛が誰かの名前を呼んだことって一度もないよな。

「でも……いいのか？」

「何が？」

「そんな友達みたいに呼んで……嫌じゃないのか？」

「嫌ならこんなこと言わないよ。呼んでほしいから言ったんだ」

「でも……一緒に昼食べたただけなのに……」

「一緒にメシ食べて、いろんなことを話す。そういうのを友達っていうんだろ。なら、俺たちは もう友達だろ」

友達になるための定義なんてそんなもんだ。そこから親友などに発展するかしないかは別だけど。

わずかな沈黙……。

近衛は考え込むように黙ってから、

「……わかった……じゃ、じゃあ呼ぶぞ？……ジ、ジロー」

「おう、上出来じゃん」

坂町は恥ずかしかったのか、少し口調がぶっきらぼうになってしまっていた。

「……じゃ、じゃあ次は 大村だな？」

「そうだな。いつでもいいぜ」

「……わかった。せ、せい、誠時……」

頬を少し染めながら、どこか恥ずかしそうに俺の名を呼んだ。
上出来だな……。

にしても……可愛いな近衛。さすがはスバル様だな。学園の美少年は伊達じゃないな。いや美少女なんだけどさ。

「ああ。上出来だ」

チラツと隣に座っている近衛を窺うと「誠時、誠時かあ……」と何度か繰り返していた。勿論、ジローのことも繰り返していた。やればできるじゃんか。

不意に近衛の頭が傾いて俺の肩にコツンと当たった。

「…どうした？ 眠いのか？」

近衛はあくびを噛み殺しながら目をしょぼしょぼさせていた。

「いや……別に、ね、眠くなんか……ない」

と言いながらも、睡魔に襲われているのか顔がウトウトし始めている。

「眠ってもいいよ。無理しなくていいから。授業の時間になったら起してやるから」

「……………眠気なんか……………」

言い終えるよりも先に睡魔に負け、近衛は目をつむって「すうすう」と寝息を立て始めた。今日は天気がいいから仕方ないよな。

……………寝顔も可愛いな。って、落ち着け。
そんなことを考えていると、突然 俺たちの後ろから人影が現れる。

現れた人物は、俺にもたれ眠っている近衛を見てわずかに目を細めた。

「へえ、珍しいわね」

艶やかな黒髪を揺らしながら近付いてくる女子生徒。涼月奏。俺たちの様子を見に来たのかな？

「にしても、よくここがわかったな」

「そう？ ジローくんのケータイに小型発信機を搭載しているから当然じゃない」

「なにいいいいっ！」

大声をあげる坂町はケータイを取り出し 小型発信機を探している。

「それにして、眠っちゃってる。スバルが他人の側で寝るなんて、きつと緊張の糸が切れたんでしょうね」

「緊張？」

確かに今日 落ち着きなかったもんな。

「スバルにとつて あなたたちと話すのはすごく神経の張り詰めることなのよ。前の晩から緊張してたくらいにね」

「でも、こんなこと普通だろ」

「普通？ 誠時くん や ジローくんにとっては普通かもしれないわ。 でもスバルにとっては何から何まで初めての体験よ。私以外の人間と一緒に登校して喋って昼食を食べる。今までそんなことはしてなかったわ。友達が欲しくても作れなかったせいだね」

「……友達はいなくても 作ろうと思えば」

「そつだ。 作ろうと思えば作れたんじゃないか。 いくら高校からつて言っても、俺より一年も長く通っているんだ。 少くくらは作れたんじゃないのか？」

「いないと作れないじゃ意味が違うわ。 よく考えて。 スバルには誰にも言えない“秘密”があるのよ」

「……………あ」

俺は やつと涼月の言葉の意味がわかった。

近衛は自分が女の子だっという秘密を他人に隠さなくてちゃんならないんだ。

隠すにはどうすればいい？

ホント簡単なんだ。

そう、他人と関わらなければいい。

「いつ秘密がバレるか、わからないもの。だから学園では、いつも気を張っていて誰も近寄らせない。秘密を知られるのが怖くてね」

あっさり言ってるけど、近衛にとっては辛いことだったはずだ。

友達が欲しくても自分の秘密を隠すために作れない。だから……孤立。……なるほど。近衛は好きで独りでいたわけじゃなかったのか。

「でも、やっと友達になれる人ができた。秘密を知っている誠時くんや ジローくんだからこそ友達になれる」

「友達か……」

そっか。近衛は俺たちと友達になりたかったのか。……一言言うなら、馬鹿だな。そういうことなら素直に言ってくれればいいのに……でも、ありがとうな近衛。

「私はスバルにとって主だから、この娘の中では友達なんて呼べる存在じゃないと思うの。昔は『カナちゃん』なんて呼んでくれて仲が良かったんだけどね」

「……………」

なんか主従関係も難しいんだな。

「ふふ。じゃあ、また教室で会いましょう」

微笑みを残して屋上から去っていく涼月。
隣の近衛は、幸せそうな寝顔をしている。
さて、俺はジローのケータイについているという小型発信機探しを手伝いながら深く溜め息を吐いた。

x

近衛と友達になった日。

家の前まで来たので三人と別れた。

玄関を開け、

「ただいまー」

「おかえり」

聞き慣れた声に改めて前を見ると、そこには紅羽が立っていた。格好はまだ制服のままである。

「ああ、ただいま……」

あれ。思っていたより落ち着いてるぞ。それどころか元気がない。やっぱり近衛に負けたのがショックで落ち込んでいるのかな？熊五郎も今日はサンドバツクにされていなかった。

「兄さん……一つ訊いていい？」

「ん？なんだよ？」

妹のやけに真面目な口調に緊張してしまふ。もしかして遺言とか訊かれてるんじゃないよな。次に喋ったことが俺の最後の言葉（）

遺言() になつたりして。あははは、って笑えねーぞ。

「兄さんって……………近衛先輩と付き合ってるの？」

「ち、違う。あいつはただの友達だ」

「……………そっか。そうだよな。昨日のは全部あたしの勘違いだったんだよね。ごめんね兄さん」

ホツと胸をなで下ろし俺に頭を下げる紅羽。

ん？顔が赤くなってるような。風邪でも引いたのか？

「あのね……………兄さん。あたし……………好きな人ができちゃった」

「……………は？」

「こんな気持ちになつたの初めてで……………どうしたらいいかわからなくくて……………」

「その相手って……………まさか！？」

「……兄さんの友達」

紅羽は恥ずかしいのか、もじもじしていた。
警戒警報発令。嫌な予感しかない。

「近衛先輩って変わってるけど強くてかっこいいよね」

俺に歩み寄ってきた紅羽の顔は、元気いっぱい
えへへと笑っていた。そして……

「あたし……、大好きになっちゃった」

「なっ！」

大変だぞ、天国の親父。
あんたの娘が、女の子に恋しちゃったぞ。

それも男だと思って……

第三話 好きな人ができちゃった（後書き）

お久しぶりです！最近、疲労で倒れてしまいました。阿良々木雅です。

いや、疲労を起こしてしまって……。夏休み最終日前ぐらいから徹夜で小説を執筆していたのが悪かったのか、ホント情けないことに近所にある本屋で『まよチキ！』の漫画を購入して自宅に帰宅して……。眩暈を覚え、気付いたらベッドで眠っていました……。当時、倒れたときに脳裏によぎったのは『まよチキ！』漫画読んでないじゃん！と思いました。

しかし、自分の中で決めた×切りがキツくて身体を壊したのは事実なんです、これは自己管理ができてない証拠です。女の子に抱きつかれたり触られ過ぎたりして失神するわけでもないのに……。そんなシチュエーションに巡り会えるのは『坂町近次郎』ぐらいですかね。まずは、この場を借りて読者の皆様。【迷える執事と秘密の恋】略して『まよコイ！』をお気に入り登録ユーザーの皆様。更新遅れまして、誠にすみませんでした。

そして、三話目を出すにあたり、今回も大勢の皆様のために頑張らせていただきました。感想をくださった、セイバーさんの要望通りに書かせていただいています。『宇佐美』はまだまだ先ですが（汗）

さて、最後にちょっとした予告なんですが、もし四話目が投稿できるのであれば、プールに行く前かプールのお話になりそうです。いろいろ賑やかになりそうです。

ではでは、また皆様とお会いできることを願いつつ、ガソリンを投入したのでアクセス全開で突っ走っていききたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

『まよコイ!』のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様
と出会い、幸せな作品になってくれますように。

第四話 ベッドの上で（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った 皆さんには
はじめまして。

『まよチキ！』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
夜遅くに、どうもです！

阿良々木 雅と申します。
アニメ『まよチキ！』第八話【初めてなんだ】の温泉シーン。近衛
の父さん……何故スバルのパンツを知っている（笑）
今回は少し短いです。

いつも短くしろよって話ですよ。すみません。
今回は『もちろん ベッドの上で』の話の前半似になっております。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ「」ご覧ください。

では、第四話目を楽しんでください。

第四話 スレッドの上で

「…………ふぁ」

俺は欠伸をしながら、一階に向かっていた。すると、数秒後……ピンポーンと。玄関のインターホンが鳴った。どうやら誰かが訪ねて来たようだ。少し服装【着替えたばかりの制服】を整えてから玄関まで行き、カギを開ける。

「おはよう、誠時」

「おはよう近衛。また一緒に行くのか？」

「駄目だったのか？今日は誠時と、ふっ、二人で学校に登校したいから……………」

そこまで言うと、頬を赤く染めて俯いてしまった。

「…………たく、いいよ近衛。一緒に登校しよう」

これが俺、大村誠時の本日の始まりになったのである。

x

「あはははははっ！」

ここからは俺、坂町近次郎がナレータとしてお送りいたします。
俺の話を聞いて、涼月奏は目に涙を浮かべながら爆笑していた。
現在は昼休みの屋上。

144

「大丈夫かな、紅羽のヤツ。昨日の蹴りで自分の下着見られたって
言ってたし。このまま不登校とかにならなきゃいいけど」

「あら、それなら大丈夫よ」

涼月はわかりきったことでも言うように、

「だって、あそこにいるわよ。あなたの妹さん」

俺の背後を指指した。

「は？」と振り返ると、屋上の扉。
そう、わずかに開いていた扉の隙間から、こちらを覗いている人
物がいた。

「げっ、紅羽」

ホラー映画の光景を見たかのような呻き声を上げた瞬間だった。
どかんっ、と大きな音と共に屋上の扉が開いて、見慣れたシヨ
トカットが現れた。

坂町紅羽。

「探したよ。兄さん」

「お、おまえ、いつからそこに……………」

「今さっきかな？」

「どうして疑問系なんだ？」

「それより、近衛先輩。昨日のあたしの下着見てなんか言ってた？」

「いや、何も……………」

「ノーリアクション!? さすがボーイズ・ラブ」

「どうして、そうなるんだよ!」

なんてこった……。実の妹に同性愛者だと認識されている!

「仕方ないわね。こうなったら本当のことを言いましょう」

涼月はしっかりと紅羽と向き合った。その美しい口唇（くちびる）（くちびる）がゆっくりと言葉を紡ぐ。

「スバルは、あなたのお兄さんのことが好きなのよ!」

「おいっ!」

ちょっと待てよ!

いきなり過ぎだろ! 何言ってるんですかこの人!?

「ちっぴり……………」

うなずく紅羽。

「でも安心して。だってジローくんは、この私と付き合ってるんだもの」

……沈黙。

「は？」金属バットか何かで、頭部をフルスイングされた感じだった。

紅羽も同じだったらしく、目をパチパチとさせている。

「そつ……そんなつ！ そんなの嘘です！ そんなの信じられません！ ちゃんとした証拠でもない限り、そんな話を信じるわけが……」

「わき腹の痣。彼、わき腹のところに痣があるでしょ」

その一言、いや、その単語に、妹は銃弾でも撃ち込まれたかのよううにピタッと固まった。この痣を知るのは妹の紅羽と母さんくらいだ。

「どっしり……」

「もちろんベッドの上で」

全く表情を変えずにとんでもないことを言う涼月さん。

確かに嘘は言っていない。“あの時”コイツに保健室のベッドの上で服を脱がされたのは事実だ。まあ、なにもなかったはずだけど。

しかし、そんなことを全く知らない紅羽は、顔を真っ赤にして茫然と立ち尽くしていた。

一つ深呼吸をしてから、

「そ、そんな……べべべっ……ベッドって……でっ、でも……兄さんは女の人に触られるのが苦手で……鼻血が出ちゃうのに」

「大丈夫。多少の障害なんて二人の愛があれば乗り越えられる」

「そんな……」

涼月の言葉がかなりショックだったのか、紅羽はもはやひっくり

返る寸前だ。タオルがあるなら投げ込んでみたい。まあ、そんな俺は　この状況事態に呆れてるんだけどな。

「私はあなたを応援したいの」

「……………え？」

打って変わって、彼女は優しい口調で囁いた。

「だって、あなたは将来、私の妹になるかもしれないんだもの。よろしくね紅羽ちゃん」

完璧なスマイルとともに、涼月は最後の弾丸を撃ち込んだ。決まった。そう最後の弾丸トドメの弾丸だったのだ。　決もはや決着はついた。

「涼月先輩。……………いえ、お姉様」

「紅羽ちゃん」

「お姉様」

がっしりと。

二人は固い握手を交わしていた。

「どうやら、二人には言葉では表せない強い絆が一瞬で結ばれたらしい。」

すると涼月は、

「でね、スバルにはちゃんと女の子と恋愛して欲しい。だから、今週の日曜日、ダブルデートしましょう」

懐からチケットのようなものが取り出される。それは、最近この近くにリニョーアルオープンしたレジャーランドの入場券だった。

ダブルデートなのに、どうして五枚もあるんだろう。

そんな疑問を抱きながら、昼休みの時間が終わった。えー、以上！坂町近次郎がお送りいたしました。

x

もちろん、この学園は名前の通り私立校である。
現在。

下校時間となった現在、その多種多様な集団。友達同士。一人。
など様々だ。そんな集団が自身の目的地へと向かって校門をくぐり
抜けようとしていたんだ。

「俺は思うわけだ」

まだ微かに青い夕陽の中――柏木友哉は、真剣な顔をして呟いて
いた。

「誠時！ おまえはB.Lだっことをだ！」

その言葉を聞いた俺は、溜息を吐き出しながら、黒の折りたたみ
式携帯電話を開き液晶画面で現在時刻を見ていた。

「17時10分か……………」

と呟いた俺を、友哉は呆れた顔で見てきた。

「スルーかよ」

「まあ、誠時が どんな性癖があっても俺たちには関係ないだろ」

大地の言葉に、金髪にピアスといった外見をしている友哉も「そうだよな」と笑っていた。

「まあ、心配してくれて ありがとう、大地。友哉」

二人の親友に微笑みかけられた、俺も自然と笑顔を浮かべていた。

俺、大村誠時。

仲村大地。

柏木友哉。

俺たち三人は、中学時代以上の付き合いがある。それに俺には血の繋がりが誰一人もないことも知っている。

だからこそ、いや、そんなことを知らなくても笑い合える気の許せる親友同士なんだ。

「よし、久しぶりに三人でゲーセン行こうぜ！ そして三人でナン

「パだ！」

「友哉……おまえ」

「悪い。早く帰って晩飯作らないと………」

夕方になるとまだ少し肌寒く感じるかもしれないが、三人で帰っている時の空間はいつも温かい。

俺たち三人が校門を通り抜けようという時に、ふと友哉が立ち止まり、私立浪嵐学園の校舎を見つめている。

「まさか、また誠時と同じ学校に通えるなんてな」

「ああ、そつだな」

「……おまえら」

俺は珍しく感傷的な事を言う友哉の言葉に少し涙腺が緩む。それを見ていた大地に弄られると思っていたが、何もしてこなかったがにつこり と微笑んでくれた。

それから、それぞれの帰路に向かった。

誰もいない家の前まで来たので鞆の中からカギを出した。

俺の家は普通の一軒家より、少し大きい。外から見ればただの一軒家なのだが、一部だけ防音設備が整っている部屋がある。今では、たまに演奏で使う程度の部屋に成り下がっている。そんなことを説明しながら玄関のカギを開ける。

「ただいま……」

扉を開けると、もちろん家の中は真っ暗な……はずだった。……
……おかしいな。リビングだけ電気が点いている。戸締まりし忘れたかな？それとも電気点けっぱなしで学校行ったのかな？

そう思いながら、廊下の電気を点け、リビングに向かい、パツと見では、誰もいなかった。確認し終えた俺は冷蔵庫からミネラルウォーターを飲んでいると……。

「おかえりなさい誠時くん」

突如として聞こえてきたその言葉に、俺は飲みかけのミネラルウォーターを思いっきり吹き出した。

「だ、大丈夫か!? 誠時」

リビングから届く聞き慣れた始めた声。聞き慣れた始めた声の主は二人、一人は艶やかな黒髪と抜群のプロポーションの美少女。クール&ビューティー。頭脳明晰かつ文武両道というパーフェクトな成績を持つ。私立浪嵐学園のアイドル的存在。

涼月奏。

最後に、俺を心配してくれた声の主は、職人が鍛錬に鍛錬を重ね精巧に造られた人形みたいな綺麗な身体に、端正な顔立ち。明るい髪を束ねた髪型、透き通った瞳、澄み切ったアルトボイス。学園の王子的存在。

近衛スバル。

近衛は、キッチンまで来てミネラルウォーターを吹き出したフロアリングを自身のハンカチで拭く。なんか、こんな姿を見ていたら『さすがだな』って思ってしまう。

だが……この家は……何を隠そう俺の自宅だ。

なのに……

涼月はリビングのソファに座っているし、近衛はフロアリングを拭き終えソファに座っている主の隣に立った。

「はあ。なんで居るんだよ……カギとか渡した覚えないぞ」

「カギならあるわよ?ここに」

と言った涼月の懐から出てきた物は、まさしく俺の自宅のカギだった。

「なんで、涼月が持つてるんだよ」

「知りたいなら教えてあげる。大地くんに譲ってもらったの」

「……」

「ちなみに、マヨバーガーを奢ってあげたら、譲ってくれたわ」

はあ……。

溜息を吐き出したいよ。

よしっ今度、大地にマヨバーガーの和風ダレカツバーガーセットを奢ってもらおうか。

「それはそうと誠時くん……今週の日曜日……予定は空いてる？」

「……日曜日？明後日か」

俺は黒の折りたたみ式携帯電話で予定を確認すると……。

週の日曜日 空白

某

「予定は空いてるけど」

「じゃあ、日曜日 ここに集合します」

懐からチケットのようなものが取り出され、俺に渡される。どうやら最近リニューアルオープンしたレジャーランドの入場券のようだ。

渡し終えた涼月はソファから立ち上がり、玄関に向かった。その後ついて行く近衛。

……玄関のドアの前まで見送った。

「……久しぶりだな、プールなんて」

そう呟いた俺は脱衣所に向かい、風呂に入った。
こうして、本日は終わりを迎えていた。
この日見た夢は久しぶりにいい夢を見れた筈だ。

第四話 ヘッドの上で（後書き）

【迷える執事と秘密の恋】を一話ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【迷える執事と秘密の恋】を四話まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

どうも！お久しぶりです？先日からストレスで体調を崩してしまつた。阿良々木 雅です。

ええ、実は僕、生まれつき気管支炎持ちで身体が病弱なんです。

尚 心も弱いんで……（汗）

さてさて、それでは、恒例となりつつあるかもしれない次回予告なのですが、第五話目はもちろんプールです。

僕もまさかこんなに早く第四話目が投稿できるなんて夢に思っていますでした。これもひとえにこの作品を手を取ってくださいている読者の皆様のおかげです。誠にありがとうございます。

ではでは。また皆様と第五話目でお会いできることを願い祈りつつ、まだまだアクセル全開で突っ走って行きたいと思しますので、どうぞよろしく願います。

この後書きが書けるのも、作品を投稿できるのも、この作品を読んでもくださった読者の皆様のおかげで生まれたものです。初PV 15000達成いたしました。

皆様の応援がある限り、誠時たちは次へ次へと歩みを止めません。

【迷える執事と秘密の恋】略して【まよコイ！】のキャラクター

たちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってく
れますように。

第五話 すごく心配したんだぞ（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った 皆さんには
はじめまして。

『まよチキ！』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
どうもです。

いつもお世話になってます。
阿良々木 雅です。

アニメ『まよチキ！』第九話での涼月が凄く可愛いかったですね。
しかし、宇佐美……一回除霊しようよ……。
今回は

ちょっと途中で区切りました。では今回、またまた長い文になって
いますが、どうぞよろしくお願いします。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ「」ご覧ください。

では、第五話目を楽しんでください。

第五話 すごく心配したんだぞ

本日は日曜日。

ほどよい眩しさが心地よい天気になった。

まあ要するに快晴なのである。

またまた、まあなのだが、雷が鳴っていようが雹が降っていようが今日俺が向かっている施設には あまり関係ないのだ。

全天候型レジャー施設。

その魅力は説明しなくても判るかもしれないが、一応、突っ込みとかで説明しているから説明しよう。もう一度、その魅力はなんといつても充実した屋内設備だ。いくつものプールと多彩あるアトラクションを完備した温室ドーム。

人工的に作られた常夏の……うーん、確か友哉曰わく『パラダイス樂園』
って言ってたような気がするな。

人工的に作られた【プール兼樂園】は、春だろぅが冬だろぅが終わりのない夏。つまり【エンドレスサマー】。

まさに、都会にできたオアシスなんだ。

(にしても、休日の駅は混雑しているんだな……)

目的地【レジャーランド】の最寄り駅の改札を抜けた。

しかし、休日に女の子とプールか……。

デートってことになるのかな？こんなことを友哉に訊いたら絶対に『この羨ましいヤツめ！』と言うかもしれないな。

さて……音楽でも聴くかな。そう思っただイヤホンをつけ、音楽プレイヤーを弄っている。

駅から歩くこと数分。待ち合わせ場所に指定したレジャーランドの入り口に見なれた始めた始めた四人組の背中を発見。

ジローと紅羽ちゃんと近衛と涼月だ。

どうやら何か話し合いをしているらしく、四人とも俺に気づいていない。おそらく、ジローの女性恐怖症を治すためのプランとかを話し合っているんだろう。

まあ、とりあえず挨拶をしますかな。え？誰に挨拶するかって？もちろん ジローたちにだ。

「うーす。待った？」

右手を軽くあげて、挨拶をした。

「よお、誠時」

「あら、誠時くん」

「大村先輩だー」

「やあ、誠時」

どうやら、俺が来ることをジローたちは知っていたみたいだった。

「それじゃ、そろそろ行きましょう」

涼月の先導でレジヤールランドへと入る。広々としたロビー。リニユールオープンしたため内装は新しく綺麗だった。

エントランスを抜けた後、カウンターでチケットを腕につける。日フリーパスと交換してもらい、そのまま更衣室に向かった。

「じゃあね。スバル」

と涼月は言い残し更衣室へと入っていった。

まあ、当然な説明をするんだが聞いてくれ。もちろん男女別々だ。え？何が？それは、更衣室だろう。ちなみに待ち合わせは更衣室を出たところになった。うーん、隣に居たジローはちょっとテンション上がってるし、俺的には泳ぐのは嫌いじゃない。嫌いじゃないけど大好きというわけでもない。そうだな、うむ、普通だ。

意気揚々と更衣室に入っていくジロー。その後ろについて行くこととすると……急に、後ろから学生服っぽいワイシャツの裾を引っ張られた。

振り返ると、近衛が親にすがりつく幼い子供みたいに俺が着ているワイシャツの裾をぎゅっと掴んでいた。それに気付いたジローも足どりを止めた。

近衛の頬を少し覗くように見ると、少し赤い染まっている。

「せ、誠時……」

「? どうした?」

「い、いや……………」

耳まで真っ赤にして黙ってしまった近衛。

体調が悪くなったのかな?とか考えていたら、ふと……………重要なことを思い出した。

そう……………近衛スバルは、女の子だ。

「……………」

絶句する俺たち。

こういった展開は……………どうしたらいいんだろう。

そう言えば体育の着替えとかでも近衛って教室に居たことなかったな。きつとそういうときは“例の男子トイレ”で着替えているんだろうけど、今日は隠れる場所なんか存在しない。プールに入るためにはこの更衣室を通過するしか手段はないのだ。

「……………わかった。俺が引っ張っていくから近衛は目を閉じてろ。そろなら入れるだろう?」

即刻で思いついた提案に、近衛は コクン と小さく頷いてくれた。

そうして、俺たちはゆっくりと更衣室【魔の領域】へと足を踏み入れた。

当然ながら中は男の裸体で溢れている。なんていえばいいのやら、悪い。本当に悪い。説明しにくいくらい、凄まじい光景だ。おそらく、こんな光景をテレビで放映したら深夜でも苦情が大殺到すること間違い無しだろう。

裾を掴んでいる近衛を更衣室内【魔の領域】にあるシャワーまで誘導する。ここならシャワーカーテンがある。カーテンさえ閉めれば中の様子は見えなくなる。

「見張ってやるから、ここで着替えるよ」

「う、うん……」

耳まで真っ赤に染まっている近衛は コクン と頷きシャワールームに入っていく。

「さて、この近くで着替えるか」

「そつだな」

残念つてわけではないが、覗かないからな。さすがに、そんなことをしたら傷つくのは近衛だからな。

.....

.....

数分後、着替え終えた近衛がカーテンを開けて出てきた。当たり前だが水着は女物じゃない。グリーンのパーカータイプの上着と膝上丈のハーフパンツ。俺たちの着替えもすでに終わってるので、あとは荷物をロッカーに入れてさっきと同じ通路【魔の領域】を歩き待ち合わせの場所まで移動するだけである。ロッカーに入れるために近衛が持ってきたバッグを受け取るが、やけに重い。ズツシリと重い。

一体何が入ってるんだろうと気になってしまう。ジローから聞いた話だが、中には拳銃やらスタンガンやら手錠やら……なんやらまで、まあ、きつと護身術用か警護用なんだろうけどな。でも、こんなに持ち込んでるって知られたらテロリストか犯罪者と勘違いされるだろうな。

そんなことを思いながら、俺とジローと近衛の荷物をロッカーに押し込んでから、やっとのことで更衣室【魔の領域】を脱出する。

「遅かったわね」

更衣室を出たところで、涼月の声があった。

目の前には水着に着替えた涼月。あんな水着をなんていうんだっ
たかな？ うーん（思い出し中）……………あ！！ ビキニだな。うむ
ビキニだ。って二回も言ってしまったな。で色は黒。涼月奏の艶や
かな黒髪に合う色。またはイメージ通りとも言えるだろう。にして
も、学園のアイドルと言われるだけのことはあった。スタイル抜群
ウエストや太股が すらっとしてるのがすげえ。何を食ったらこう
なるんだらうな。

涼月の隣にはジロー、坂町近次郎の妹の坂町紅羽。こちらもち
らで可愛い水着を着ていた。水着の色は赤。真っ赤なビキニ。無論、
似合っている。けれど、ジローは紅羽ちゃんに対して哀れみの目で
見ていた。

「兄さん。なんか失礼なこと考えてないよね？」

ジロリと睨まれているジロー。俺はプールに視線を移す。

なんていえばいいのやら……………とにかくデカいの一言で表現しと
くかな。

さすがは全天候型レジャー施設だな。

温室に保たれたドーム内と陽光が降り注ぐガラス張りの天井。説
明したけど、目にするともう一度言いたくなるよ。ホントにプールの
種類も豊富でウォーターライダーの付いたものから流れるプー
ル、海を再現した波の出るプールまでもあって、まさにトロピカル
サマー。そんな言葉が似合う南国ムードである。

そんな南国ムードでもまだ夏本番じゃないからなのか、そこまで

混雑していない。

「あ……あの、近衛先輩……」

紅羽ちゃんはモジモジしながら近衛に話しかけていた。

「その……よかったら一緒に泳ぎませんか？ 実はあたし泳ぐのが苦手で……その、で、できれば教えて欲しいなあなんて」

「嘘つけ。おまえ泳ぐの得意だろ」とか呟いている。

「別に構わないが……」

近衛はチラツと涼月に視線を向けた。主の安全が気になるみたいだ。さすが執事だな。そんな近衛の視線を感じた涼月は、

「大丈夫よ、スバル。いざとなったらジローさんと誠時くんが護ってくれるから、私のことは気にしないで行ってきて」

「……わかりました。頼むぞジロー、誠時。信用しているからな」

念を押すように言って、近衛は紅羽ちゃんと一緒にプールの方に

歩いて行った。

俺たちが口を挟む前に会話が終了してしまった。そんな「頼む」って言われてもな。信用してくれるのは嬉しいけどさ、一体何から涼月を護ればいいんだ？

それから……暫しの沈黙。

この沈黙を破ったのは……ジローだった。

「なんなんだよ今日の近衛」

「ここに来るのは何年ぶりかしら」

「来たことあったんだな」

と、言った俺の言葉に頷きながら涼月は思い出すかのように少しの間だけ瞼をおろした。

「ええ、私とスバルはここ（レジャーランド）で誘拐されたの」

「誘拐？」

どうやら本当のこのようだ。その証拠に涼月の表情は今まで見たことがないくらいに真剣だった。

「目的は身代金だったそうよ。事件はすぐに解決して犯人は全員捕まったの。でも、そのせいで私は外出を制限されてるの。きつとスバルは責任を感じちゃってるんでしょね。私が誘拐されたのは自分のせいだ、執事として主を護ることができなかった……ってね」

「でも、近衛も子供だったんだろ？」

「そうよ、あの事件以来、私とスバルの距離は離れてしまった……」

「…」

……事件は解決していても涼月たちの心には、深い深い傷が残っているのかもしれないな。

「けどね、私はもうそろそろ仲良くして欲しいのよ。また昔みたいね」

そう言えば、昔は涼月のことを「カナちゃん」って呼んでいたらしいんだよな。学園で見る様子からは想像も付かないけど、事件が起きる前は今よりずっと仲が良かったんだろう。

ホント、それこそ、友達みたいに。そう主や執事など忘れて、ただ純粹に……

「ジローくん。あなたに女性恐怖症って弱点があるのと同じように、スバルにも弱点があるのよ」

「弱点……」

……弱点か。

うーん、なんだろうな。

「はい、そろそろ話は終わり。私たちも泳ぎましょう」

プールの方に向かって歩き出した彼女は、いつもの涼月奏に戻っていた。

「ほら、ぼんやりしないで。ジローくん。今のあなたは私の恋人でしょう」

「そ、そうだったな」

と、返事をしたジローの腕を自然に涼月の腕が回されていた……
ってジローのヤツ大丈夫かな？顔が見る見るうちに真っ赤になって
鼻血が出てるけど……そんなジローを見て涼月は楽しんでいた。

「誠時くんも行きましょう」

微笑みながら俺に手を差し伸べてくれる涼月。その手を優しく握
りしめ俺たちはプールに向かって走り出した。

あ……しまったな。医務室の場所確認しておくの忘れてたな。ジ
ローが鼻血で倒れたときのために……。

x

午前中は指がふやけるくらいに泳ぎまくっていた。俺は ぶかぶ
か と背泳ぎみたいに浮いていた。だからなのか、午後からはアト
ラクシオンで遊ぶことになったのだ。

俺はなんでもいいけど、ジローのヤツ鼻血を出した回数は午前中
だけで二桁ぐらいの数までに届いていた。やはり医務室を見とけば
よかったかな。ジロー曰わく『恐るべし悪魔涼月（）デビル涼月（）

』と呟いていた。

まあ、ここ【レジャーランド】は温室ドーム内のわりに様々なアトラクションが揃っていて、涼月曰わく、一番の話題はスライダーらしい。昼食を食べた後に五人で行こうということになったのだが……。その前に『ジューズを買ってきてほしい』と涼月に頼まれたので俺と近衛とで行くことになった。

「午前中はどうだったんだ？紅羽ちゃんと一緒にいたんだよね？楽しめたか？」

ジューズを買いに向かいながら、隣にいる近衛に話しかける。ちなみにジローは医務室に行っている。

「ああ、楽しかったよ。紅羽ちゃんは明るくていい娘だ」

近衛は嬉しそうな顔をしている。学校でもあまり見せない笑顔を。

「そっか。よかったじゃんか近衛」

「ああ、誠時はお嬢様やジローとも一緒にいなかったみたいだが、何をしていたんだ？」

「ん？……ああ、ずっとボーっとしてたよ」

「そうか。にしても、羨ましい」

ふと、近衛の顔から笑顔が消え、その顔に影が落ちた。俺は「どうしたんだ？何が羨ましいんだ？」と訊いた。まさか、家族とケンカでもしてるのだろうか。

「いや、ボクなんて、昨日もお父さんとケンカしてしまった」

「？……なんでケンカしたんだ？」

理由もなく息子や娘を怒ったりシバく親なんか数少ない。そんな親は親じゃないしな。だから、きっかけとなる事はあつたはずだ。まあ、ジローは例外だよな。『愛の鞭』『新技』とか言われてシバく親なんだよな。あと紅羽ちゃんもなんだよな。

「ボクはただ、ジローと初めて会った日のことを話しただけなのに」

「?初めて会った日?」

「うん。初めて会った日、ジローが人気がない理科室でボクを押し倒して胸を触って鼻血を出したって言ったんだ」

……ジローお前そんなことしたのか。

「そしたら、そのクソ眼鏡をオレの前に引きずり出せ! 八つ裂きにして吊してやる! って」

「……そうか」

それは怒り狂うのも無理ないよな。だって近衛の父親からしたら近衛は宝物だもんな。

「あ、あと誠時と友達になった日あるだろ」

「……ああ」

「あの時に、ボクの寝顔を見られたって言ったら、そのクソガキをオレの前に引きずり出せ！ 八つ裂きにして東京湾に流してやる！
っつて」

「……はあ」

そうとう近衛の父親は娘に溺愛しているんだな。まあ、なんかの機会で誤解が解けたらいいんだけどな。とにかく病院送りにはされないように気をつけないといけないな。

と、そんなこと話していたら不意に近衛がプールの方に指を指しながら「なあ、誠時。あれって」と言われた俺は近衛が指を指し示しているところに意識を向ける。見ると、波の出るプールの奥の方で小さな人影のようなものが浮かんだり沈んだりしていた……あれは、どう見ても溺れているじゃねえかよ！

「くそっ！ 誰か！」

そう叫び周囲見回すが係員の姿が見えない。これだけ だだっ広い施設だ。監視の死角エリアができてしまったのかもしれない。さらに運が悪いことに、溺れているのは小さな子供みただった。

「近衛！ おまえは係員を呼んで連れて来てくれ！」

と言いながらグレーのパーカータイプの上着を脱ぎ捨て、俺はプールに飛び込む。距離的には三十メートル弱くらい。これならいけるかもしれないな。飛び込む際に「待て誠時！」と微かに聞こえていた。

クロールでプールの水をかきわけながら全速力で進む。

プールは好きでも嫌いでもないと言ったが泳ぎには自信がある。

中学時代の頃に川で溺れていた小学生を助けたことがあるくらいだから、この程度なら何の問題は無い。

「大丈夫か！」

溺れている子供の身体を抱きかかえながら叫んだ。近くを見渡す限りビート板や浮き輪はなかった。波が出るプールは奥に行くほど深くなっていた。何かの拍子に奥まで行ってしまったのか。まあ、俺の身長なら足がつく。これなら抱きかかえたままでプールサイドにいけるだろう。しかし……。

「……む？あれ……おかしいな」

プールサイドに戻ろうとした瞬間……、異変に気付いた。俺の足に力が入らなくなっていたのだ。

「……あれ」

秒的には三秒くらい呆気にとられてしまったが、原因はすぐにはわかった。

寝不足。

そう、緊張でなかなか眠れなかったのだ。そして、今現在になって疲労が出てきたのであった。

(ヤバいっ……)

こんな状態ながらも、俺が抱きかかえている子供をよく見る。すると……俺が抱きかかえていたのは小学校低学年くらいの女の子だった。

「た、たすけて！」

溺れていたためパニックを起こしているのか、女の子は涙目になりながら俺の首にしがみついていた。

「大丈夫！」

プールサイドから女の子の母親らしき人が来て女の子を引き取ってくれた。

(……よかった。あつ、もう、無理)

意識が朦朧となり、身体が徐々に水の中に沈んでいき、目の前がボーっとしてきて……。
本当にヤバイ……。

「誠時ーっ！」

どこからか、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた気がした。
意識が朦朧として霞む視界に映る人物のシルエット。

そのシルエットが誰だかわかったとき……俺の意識は闇へと落ちていった……。

x

昔昔むかしむかしのことだ。何故、こんな事を思い出したのかもわからなかった……。

「おまえは自分の名前をどう思ったことがあるかしら？誠時という名前のことを」

薬品の臭いと ピピピツ となる心拍数を計測している機会がある、とある病室。

そのベッドの上で、当時、まだ幼かった俺に母さんはそう言った。母さんの顔は昔より痩せ細っている。

昔は元気いっぱいだったのだが……俺が生まれてから父さんが事故で死んで、それから二年後……肺癌になり医者に手術しなくてはいけない、手術しないと余命1ヶ月だと言われ手術をしたが……それから半年後に再発した。今回は必ず手術をしなくては死んでしまうと宣告された。

手術の成功率は20%。

死ぬ確率が高い。

そして、この日はその運命の手術が行われる日だった。

これが親子の最後の会話になるかもしれないっていうのにも関わらず、母さんは呑気にそんなことを訊いてきたのだった。

「わからないよ」

「そうね。わからないわよね」

母さんのベッドの側にいた俺の頭を優しく撫でてくれた。やせ細った細い細い指。そんな掌でも精一杯の優しさがあった。「くすぐりたいよ」と言った。母さんはにっこりと微笑んでくれた。

「でもね、いい誠時。おまえの名前には大事な大事な意味があるんだよ」

「大事？なにになに？」

「落ち着きなさい。よく聞くのよ。誠時は、1日1日の時間を大切にしてる？思いやりの心がある？」

幼い俺には意味がわからなかった。「わからないよ」と答えると、母さんは優しく頬を撫でてくれた。

「そうね。まだ、わからないかもね」

「うん」

「ママが言いたいのは、誰かを泣かせたりしない。要するに『私が護るから』なんて意味ならわかる？ そういえば前上映していた映画で『スタンド・バイ・ミー』ってあったね」

「護る？」

「そうよ。簡単に言えば『一緒にいてほしい』って意味ね」

「誰に言うの？」

「友達とか、そうね、誠時が好きになった人とかね」

「……あんまり、わからないよ」

「そうよね。五歳児にはちょっと難しかったわよね」

当たり前だろう。

自分の名前すら満足に書けない読めない子供に訊く方が無理な話
ってことだ。

きっと、そんなことは母さんもわかっていただろう。

でも……それでも母さんは、真剣に話の続きをしてくれた。

「誠時。おまえの名前に入っている『誠』って漢字は真心を持って
ほしい、そういう意味なのよ。自分の気持ちに嘘、偽りもない心を
持ってほしいの」

「なんか話変わってない？」

「そう？友達や好きな人には嘘、偽りのない感情を持ってほしいのよ。それを兼ねて、側にいてほしい　って言ってあげることができるとんな男の子になってほしいのよ」

「ふん」

「ふふ。誠時。全然わかってないわね」

優しく微笑みながら頭を撫でてくれた。

「心身共に強くなりなさい、誠時。おまえはママと準太さんの子だからきつと強くなってくれるわよね。強くなつて誠時の大切な人たちを護ってあげなさい。そして偽りのない気持ちで人と接してあげるのよ。これが、大村誠時と大村遥の約束よ」

「……うん！わかった！僕、嘘もつかないようにする！まもれる力をつける！僕、頑張るよ！」

なんとなくわかつたくらいだったが、あの時の俺は、とりあえず頷いていた。

まあ当時の俺の夢は立派な大人になることだったから、子供なりに母さんの言った意味を必死に理解しようとしていたのかもしれない。

まだ、この時は知らなかった。

そう、これが母さん……血の繋がりがあある肉親との最後の会話になることを……。

ああ……母さん。

俺は母さんが言ったことを守れてるかな？

側にいて欲しい。

真心を持つ。

あなたが最期に遺したこの意味。

でも、俺は俺なりに頑張ってるよ。

x

闇に落ちていた意識の中に一筋の光が差込、目が覚醒（覚めた）。

なんか古い夢を見ていた気がするな。

眩しい光に目を細めると、視界に映り込んでくるガラス越しの青い空。

どうやら俺の身体はプールサイドにあるベンチで横になっているみたいだ。

「大丈夫か、誠時」

上から聞こえるアルトボイスが耳に心地よく響いた。

近衛だ。

……そうか。俺は溺れた子供を助けようとしてプールに飛び込んで……女の子を助けて倒れたのか……。

「ああ、大丈夫。ちょっと天国にいる人と再会してきただけだよ」

ゆっくりと起き上がりながらそう答えると、近衛は眉間に小さなシワを寄せて、

「頼むからそういう冗談はやめてくれ。すごく心配したんだぞ。それに……」

「ん？それに？」

「……いや、なんでもない」

なぜか口唇（くちびる）を指で押さえながら、顔を真っ赤にして黙ってしまった。

さっきの子供の親らしき二人が頭を下げに来た。

……よかった。女の子は無事みたいだ。

「でも、なんか情けないな。助けに行っただはいいが、俺が倒れることになるなんてな」

俺には、もう居ない両親に手を引かれて仲良く歩いていく女の子を見ながら呟いた。

「そんなことはない。誠時は十分人助けをしたじゃないか」

「そうだな」

「ああ。最近の疲れを我慢してでも、あそこまで助けたんだ立派だと思っよ」

「……ありがとう近衛」

「よし。身体が大丈夫なら一度、お嬢様のところに戻ろう」

「そうだなー」

と話しながら、ゆっくりと立ち上がる。
すると……突然後ろから声をかけられた。
小さな子供。男の子だった。

「はい、これ渡してって」

そう言っつて液晶画面携帯電話。つまり画面を触って使う携帯電話を手渡して帰って行った男の子。

見たことない機種だな。涼月のかな？でも涼月って、こんなケータイだったっけ？

「なあ、近衛。それは涼月のケータイ……」

と、言いかけた瞬間。

突如、無機質な着信音が鳴り響いた。

液晶画面携帯電話の画面には『着信あり』と表示されていた。さらに液晶には非通知設定という文字が表示されている。

その着信に近衛は液晶画面に表示されている通話ボタンを押す。すると……液晶画面に映ったのは……信じられない映像だった。

オオカミ……。

真っ黒なスーツになぜかオオカミのマスクを被った人物がいた。

『アー、アー、ハローハロー？ 聞こエテマスカ？』

スピーカーから音声の流れ出す。これはアレだな。ちょっと声を弄っているな。ボイスチェンジャーを使用しているのだろう。じゃないと、男か女かもわからない加工された声がスピーカーから流れ出すことは有り得ないのだ。

「お前は誰だ」

近衛は問いただすように鋭い声を発した。俺たちに、向けたことがない声だった。

それに応えるように、画面に映ったオオカミの男は嘲笑う。

「ヒヤハハハハッ！ 意外ト落着イテルジャナイカ。大事ナ大事ナ御主人様ガイナクナツタノニサア。エエ？ 近衛スバル」

これだからボイスチェンジャーはイヤなんだ。

ひどく捻られた声で、オオカミ男は嘲るように近衛の名を呼んだ。

……待てよ。待て。待ってくれ。貴様……今なんて言った！？

なんでオオカミ男（（コイツ））が知っているんだよ。

イヤ待てよ……。

……フツ。

なるほどな。

「……もう一度訊く。おまえは、誰だ？」

なんとか冷静さを保ちながら、近衛は再度訊き返した。
俺は、オオカミ男の返答を待たずに、

「……お前は誘拐犯だな。そうだろう？ 犯罪者さん」

言った俺の声を聞いてオオカミ男は再度嘲笑う。

『ヒヤハハハハッ！ オモシロイ。アア、ソウダヨ。答エマシヨ
ウ、一度シカ言ワネエカラヨオーク聞イトケヨ、執事クン。コノ
オレ様ハ誘拐犯サ』

……やはりな。

だいたいボイスチェンジャーを使用している犯罪は誘拐系が大半だからな。そして……この後に見ることとなる映像を、まだ俺たちは知らなかったんだ。

第五話　すごく心配したんだぞ（後書き）

【迷える執事と秘密の恋】を一話ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【迷える執事と秘密の恋】を四話まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

どうも！お久しぶりですね。最近家に引きこもることが増えた気がする。阿良々木 雅です。

いえ、最近ちよつとバタバタしていたせいもあってか、気づいたら一週間も学校を休んでいましたです。たまに買い物に行くくらいです……はい。そんな感じですよ。僕は基本的にノート執筆から始まるので家の中でしか執筆しないタイプの人間でして、仕方ないと言えは仕方ないんですが。

まあ、執事してたり趣味で挿絵描いてたりするとインドアになってしまうのですかね。

そんな感じでインドアぎみな執筆環境で執筆した【迷える執事と秘密の恋】略して【まよコイ！】も、ついに第五話目です。まだ第五話目かよ！　って突っ込まれるかもですね。

最近考えることがあるんですが、この【まよコイ！】が本になって書店に並んだ時、購入してくれる方々は居るのでしょうか。僕的には 居ないと思いますね。購入者0人ですよ（汗）

今回は初挑戦？の前編後編構成の前編、プール前編ということになっておりますので、いつも以上に賑やかになっているはずですよ。さて、ここで本当に恒例になっている次回予告です。

誘拐犯を倒して涼月たちを助け出す。そして誘拐犯の正体が近衛のお父さんで、などなど見所満載になる予定です。

ここでちよつと個人的な宣伝予告を。

この【迷える執事と秘密の恋】略して【まよコイ！】のラジオを放送したいと思い、ラジオ風を書いていきたいと思っております。

で、そこでラジオらしくユーザーの皆様からお願いがあります。感想などに質問を書いてください（オリジナルキャラ初回は主に誠時くんについて。例、誠時くんの趣味は？など）。後、ユーザーの皆様からの感想も読みあげるかもしれませんが、是非読んでほしい皆様は感想&質問をドシドシ待っております。

初PV20000超えました！

ではでは。また皆様とお会いできることを願い祈りつつ、【まよこい！】と【緋弾のアリア - 黒の疾風・紅い閃光】の執筆を頑張りながら、アクセル全開で突っ走って行きたいと思えますので、どうぞ、よろしく願います。

【迷える執事と秘密の恋】略して【まよこい！】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

第六話 許してやらないからな（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った 皆さんには
はじめまして。

『まよチキ!』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
久しぶりです？

『まよチキ!』 第九巻をまだ購入していない阿良々木 雅です。
そうなんですよ。 まだ購入していません。

『まよチキ!』 第十話の挿入歌、素晴らしいですね。
でも、あのゲームは……ちょっと、欲しいと思ってしまった。 前書きでお知らせします。

PV34000越【企画】として【迷える執事と秘密の恋】略して
【まよコイ!ラジオ】を放送したいと思います（台本書き）。

なので、感想やキャラについての質問などを書いていただけると嬉しいです。

読者の皆様のお便りが読まれる可能性大です!
では、あとは後書きで。 前書きの宣伝は以上です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど
あるかもしれませんが、
どうぞご覧ください。

では、第六話を楽しんでください。

第六話 許してやらないからな

「やはり誘拐犯だったか……」

『アア、ソウダヨ。正解シタカラ、ゴ褒美ヲアゲヨウジヤナイカ』

液晶に映っていたオオカミ男から画面が切り替わる。

どこかの薄暗い室内。いや屋内か。

そこに映っていたのは床に横たわっている涼月と紅羽ちゃんと医務室に居る筈のジロー。

三人とも、死んだように動かない。おそらくは意識がない可能性が高いな。映像を見た感じ、傷跡や締跡が残っていない。もしくは……。

『大丈夫。スヤスヤ眠ッテルダケダヨ。言ツタロ、オレハ誘拐犯ダト。故ニ殺人犯ジヤナイ』

再び液晶画面がオオカミ男に戻った。

『マ、コレカラモソウトハ限ラナイケドネ』

「……黙れっ！」

「落ち着け近衛。今、お前がこの挑発に乗って涼月たちが戻ってくるのか？」

「……そ、そうだな」

俺は近衛の頭を軽くポンポンと叩く。強く握り締められた拳の力が緩んでいくのがわかる。どうやら落ち着いたようだ。さて、本題に戻りますか。

「さて、誘拐犯さん。アンタの目的はなんだ？」

『ヒュウ　　サスガセイジクン。冷静ダネエ。クールダネエ。』

ソレニクラベテ執事クンハモウ少シ冷静サガ必要ダネエ。ア、ソレトモ意外ニ臆病ナノカナ？　御主人様ノヲ護レル勇氣ガナイノカナ？
『？』

「……黙れ三下。それ以上俺の友達を侮辱するなら、貴様の指を全て切り落とす」

落ち着けてないのは俺かもしれないな。久しぶりに苛ついたな。

『ウワー、怖イナー。ソんなコトサレたら二度トジャンケンガデキ

ナクナツチャウジャン。ア、ナンナラジャンケンデ決メヨウカ？
ソツチガ勝ツタラ三人ヲ解放。オレガ勝ツタラ三人ヲ殺シチャウ
ツテノハ――

「黙れと言ったのが理解できないのか三下がッ！ こんなふざけた
会話とつと閑話休題にしようぜ。 そうだな。 目的……いや、お
前の要求だな。 それを言え」

「ヒヤハハハハハハハハハッ！ 要求！ 要求力！ イイノカイ？
 ज्याア言ツチャウヨ？ ハイ、オレ様ノ要求ハ只一ツだ。ソウダ
ナオンリーワンダネエ。コレカラ一緒ニ仲良ク楽シク遊ビマシヨ？」

……はあ。イカれ過ぎて相手にするのも馬鹿馬鹿しいな。俺
はそう思った。

この三下野郎、絶対頭のネジが欠落している。

「今カラ十分以内ニ画面ニ映ッテアル建設中ノアトラクションニ来
テネ ソコガゲームノ会場サ。モチロン、警察ニ通報シタリシ
タラ、ソノ時点デゲームオーバーダカラネエ。ア、ソウソウ、バッ
クノ中ノ危ナツカシイ道具ヲ取りニ行クノモゲームオーバーダゼ」

俺は唾を飲んだ。オオカミ男（コイツ）どうして近衛のバッグの中身まで知っている。いや、考えるクールになれ………ッ！フツ。どうやらオオカミ男（コイツ）は悪趣味な犯人だな。

「……簡単なことじゃないかよ。アンタは俺たちを尾行していた。そうだろう？」

『ヒヤハハハハハハッ！スゴイ。スゴイネエ。ソウ、オレハ君ヲヲズット尾行シテタノサ。ココニ入ル前カラズットネ』

やはりか。

いわゆる計画的犯行ってわけか。あー溜息吐き出したーい。計画的犯行が一番厄介なんだと言われていたはずだからな。

『長カッタヨ。ズーットコノトキヲ待ツテタンダ。ソコノ執事クニニ復讐スルチャンスヲネ。今度ハミスラナイヨウニシナクチャネエ』

……今度はミスらない。

なるほど……オオカミ男（コイツ）はさっき涼月が言っていた誘拐犯の一人なのかもしれないな。確か全員捕まったって言ったような。ってことは逃げたヤツがいたってことか。

「わかった。おまえの目的がボクなんだから。それで、そこに行くのはボク一人でもいいのか？」

「……近衛！ 明らかに罠だ。俺も行く！」

「誠時。こうなってしまったのはボクの責任だ。だから、ボク一人で行かせてくれ。それに誠時に、こんな危険なことはさせたくないんだ」

「……近衛。」

黙って待つてくれって言うのか。

何もせずに、ただ神様に祈りを捧げろって言うのか。

俺の友達が……危険だっていうってときに……。

『ヒヤハハハハハハハハッ！ イイネエ青春ダネエ友情ダネエ。別ニオレハドツチガ来テモカマワナイヨ。ゲームノ内容八変ワラナイカラサ』

と言つて、オオカミ男は懐から銀色に光る物体を取り出した。ナイフ。

それは刃渡りが二十センチくらいありそうなナイフ。刃が光って、禍々しさが増した。……瞬間。近衛の顔色が驚愕に染まる。

「……っ！」

『サア、ソロソロ宣戦布告八終了。 ソレデ八御機嫌ヨウ。 バイバイ、セイジクン。 執事クン』

ボイスチェンジャーで挑発する口調とともに電話が切れた。 通話が終わり糸の切れた操り人形のように、近衛は握りしめていたケ―タイを落としてしまい倒れてしまった。

「近衛!?!」

その体が地面に倒れ込む前に、両腕で支える。

ハアハア と弱々しい肩で息をしていた。

近衛は今にも失神しそうな顔色だ。

……ジローと同じだ。

なら原因があるはずなんだ。 思い出せ、そう、あのオオカミ男が懐から出したナイフを見てから……。

『スバルにも弱点があるのよ』

……ッ!

そうか……涼月が言っていた。

近衛の弱点。

近衛にもジローと似た弱点があると。

そして、今の近衛の症状。

「近衛、もしかして……刃物が怖いのか？」

導き出し辿り着いた答えを口にする。

前の昼休みときに訊いたことがヒントになった。

『料理』ができない。

確かに近衛はそう言っていたんだ。 どうして『料理』ができない。

どうして『できない』って言い方をする必要性があるんだ。 だけど、やってもないのに料理ができないというのは変だった。そこで俺は料理が“できない”ではなく、“使えない”と考えたんだ。包丁を……つまり刃物が。

それに近衛のバッグの中身。更衣室のロッカーに入れる際にチラッと見えた護身用の道具。様々な護身用の道具が揃っていたのに、入っていないものがあった。

そう、刃物だ。

チラッと見えたガスガンやモデルガンまで入っていたのに、刃物の類は一切なかったんだ。そこから導き出してきた結論。

つまり、近衛。近衛スバルは……

「……誠時の言う通りだよ。ボクは、刃物恐怖症なんだ」

近衛は重い口調で自分の罪を告白したのだった。

やはり、刃物恐怖症だったのか。

それが涼月の言っていた近衛の弱点。

……なら原因は一つか……。

……原因は、

「誘拐されたときに、何かあったんだろ。お前刃物恐怖症になっ
たきっかけが」

これは俺の推測なんだが、さらわれたときにナイフか何かで脅さ
れた。それがトラウマになってしまつて、以来ずっと刃物が怖くな
つたはずだ……。

「ああ、あの事件以来、刃物に触る……いや、見るだけでも身体に
力が入らなくなつてしまつた……」

言いながらも、近衛の指は小さく震えている。
精神的外傷。

それが原因で恐怖症になる。その感覚は俺にはよくわからない。
もし、同じように恐怖症を持っているジローがいれば、近衛の気
持ちが痛いくらいにわかつてあげられたのかもしれないのに……
俺は……。

俺が支えていた手を振り払つて、近衛はふらつく足で立っている。

「ボクは、執事として欠陥品だ。ただでさえ男の子じゃないのに、
その上刃物恐怖症……主も満足に護れないボクが、お嬢様の執事を
やっているのはおかしいかもしれない。でも、それでもボクは……
お嬢様の執事でいたいんだ」

ふらふらと今にも倒れそうになりながらも何とか主のところまで
歩こうとする近衛。

ヒツジ。

ナイフが牙なら今の近衛はヒツジだ。

食に飢えた狼に襲われた一匹の小さな羊。

その獰猛な牙に震えながらも、必死に抵抗している。

ただひたすら、自分の主……涼月奏を護る為に……

「……………近衛」

小さな弱い背中に、俺は喋りかけた。

「心配しなくていい。絶対にお嬢様たちを助けだしてみせる。だから、ここで待って……………」

と言った近衛は黙った。

いや、正確には黙らせた。

近衛の前に行き腹部に俺の左拳を打ち込んだ。

「せ、誠時……………」

思ったよりも強く入った拳によって、近衛の身体はゆっくりと俺の胸あたりに寄りかかるように倒れた。

近衛の透き通った瞳は、疑問に満ち溢れながらも俺を見つめていた。

「許してくれ、近衛。あとで近衛の言うことを聞いてやるからさ。だから、今の間だけでいい、ちょっと眠っているよ」

そう言い終わった俺の言葉と合わせるように、近衛は意識を失ってくれた。

その精巧な身体をプールサイドのベンチに優しく寝かした。……どうしてだ。

どうしてこんなことをしたんだろうか、正直わからない。でも、一つだけ思えて言えることがある。それは、

「大事な人を護る………か」

この時、一瞬だけ、なぜか、母さんの言葉がふと脳裏に浮かんだ。俺が護る。理由はただそれだけ。それだけで十分な理由だろ。

「………ったく。何やってんだよ俺は」

ガラス越しに見える青空に呟く。
さてさて、建設中のアトラクションにいる誘拐犯に会いに行きますとしようか。

建設途中のアトラクション。各場所には立ち入り禁止の看板が立ててあった。

日差しによつてほどよく照らされる通路には作りかけの設備や資材でいっぱいだった。通路を歩くと、目立つ看板があった。『オオカミ男注意』という看板が……まったく、ふざけた奴だな。

俺はその看板を右足で蹴り飛ばした。するて……パチパチと手を叩く音が聞こえた。その聞こえた先を見ると、オオカミ男が拍手をしていた。

黒いスーツにオオカミのマスク。

ソイツは朝礼台のような物の上で仁王立ちして待っていたようだ。そして間違いなくさっきの電話の相手……涼月と紅羽ちゃんとジローを誘拐した犯人。

冷静に周囲を見回してみるが、三人の姿はない。

「ゴ心配ナク。セイジクン。三人ナラ アノドアノ奥サ」

首でドアの方向を教えるオオカミ男。

「アア、ソレニシテモサツキノキミハ格好良カッタネエ。マルデ漫画ノ主人公ミタイダッタヨ セイジクン。デモナンデー人デ来タンドアイ？二人デ来ルツテ選択肢モアッタノニ」

ボイスチェンジャーの声で訊いてきた。

……なんでだろうな。

確かに、二人で来た方が良かった気がする。俺が来るより近衛が来た方が良かったかもしれない。

でも……それだけは、嫌だったんだ。近衛を、いやスバルを危険な目に遭わせるのだけはしたくなかった。

それに、俺はこのイカれた三下野郎だけは許したくない。

ジローと紅羽ちゃんと涼月を誘拐したコイツだけは、近衛に自分のこを“欠陥品”だと言わせたコイツだけは……。

絶対に許したくない。許せない。

「サテ、ルールダガキミガ勝ツタラ三人ヲ解放。キミガ負ケタラ三人ト一緒ニ捕マツテモラウヨ。執事クンガ起キテ来ルマデ君デ遊ボウトシヨウカ」

俺が来ても近衛が来るのを待つつもりか。

やはり、目的は近衛スバル。今、目の前に立っている俺のことは眼中にないのか。

メンドイけど、やるか。久しぶりのストリートファイトだしな。

それに、友達や近衛を護る責任がある。

負けられない責任がな。

勝って、ジローと紅羽ちゃんと涼月を取り戻さないといけないからな。

「アア、ソレカラ一ツダケ。一番大事ナコトヲ言ツテオクヨ」

オオカミ男は ピツ と指を立てて、横に振り、一言だけ、

「……………死ナナイデネ」

それが……始まりの合図だった。

驚くことに、オオカミ男は始まりの合図と共に一步を踏み出した。その踏み込みが、すぐく五メートル以上ほどあった俺との距離をゼロにしたのだ。

「……………!!」

速い。

その一言しか出ない。スピードもだが……………何より、攻撃へのモーションが速い。繰り出される黒い腕。

右ストレート。

避けれない。

そう思ったときには、固い右拳が身体に突き刺さっていた。

「ぐはっ!!」

右ストレートだけかと思ったが、この腹部にくる痛み。

……………やばい。

鳩尾を狙われたな。

呼吸が……………しにくい。

右ストレートの衝撃で後ろに吹っ飛んだのか腹部に突き刺さった
膝蹴りなのかはわからない。

コイツ。強い。

信じたくないが、コイツ、強い……。

「……調子こいてんじゃねえぞ！ クソガキ！」

低く掠れたハスキーボイス。一瞬だけ、今までのボイスチェンジ
ヤーと違った声が聞こえた気がしたが、考えている余裕すらない。

「っはっ……！！」

身体を射抜くようなボディブロー。わき腹を貫く激痛に呼吸が止
まる。先程の鳩尾以上の痛みで膝を地面につきそうになるが、なん
とか踏みとどまった。……まだ、倒れるわけにはいかない。
倒れるわけにはいかないんだ！

「へエ、丈夫ダネエ。今ノヲ喰ラツテ立ツテラレルナンテサ」

最初と同じ軽薄な口調にボイスチェンジャー。

その機械声に忍えるように、俺は血が含まれた唾を吐き出す。

「この程度で倒れるほど弱くないんだよ！」

と言いながら、思いつきりオオカミ男の鳩尾を殴り返す。
鳩尾に突き刺さる“右拳”
しかし――

「ヒヤハハハハハ――！？」

機械仕掛け【ボイスチェンジャー】の哄笑だったはずだ。
哄笑の途中に左拳でアッパーをしていたのである。
……オオカミ男の身体が少し宙に飛ぶ。
まさかここまで強いとは。厄介な犯人だ。

「ナカナカ、ヤルジャンナイカ」

お返しとばかりに放たれる右ストレート。それを両腕で防ぐ。
次は膝蹴り。
見事なコンビネーション。
膝蹴りは軽やかに避けることができた。
オオカミ男は一度離れた。
しかし――

「……っ！」

離れていたオオカミ男が間合いを詰めて右アッパー。

「…くはっ！」

アッパーによって宙に上がって落ちてくる身体に膝蹴り。

そのまま前に倒れようとした俺の顔に、強烈な蹴り。まるでプロのサッカー選手のようなボールを鞭でシュートするような蹴りだった。もし俺の頭がサッカーボールだったら……なんてことは考えないでおこう。

最初の一撃より強くなっている力に身体が堪えられなくなり、膝を落とそうとすると膝蹴りが飛んできた。

まるで家内が出たゴキブリを徹底的に潰すみたいに、何度も何度も……

「……………」

顎への膝蹴りの衝撃に、身体が揺れる。

……ヤバい。視界が歪んできた。今の膝蹴りで、脳を揺らされてしまった。

幸い顎の骨は折れてないが………口の中は血の味しかない。瞼の上から流れ出した血が視界に入り込んだ。

「ソロソロ倒レテクレナイカナ！」

俺が立ち上がるのと同時に、攻撃が再開される。

身体が悲鳴をあげるほどの激痛。一方的な暴力。

気を抜いたら倒れてしまいだらう。

このまま意識を失って倒れたら、楽になれるはず……。でも
……それでは意味がない。
助けに来た意味がない！

「……はあはあ、来いよオオカミ男！」

臉の上から流れ出していた血を手で拭い、挑発するように言った。

「イイダロウ。ソロソロゲームセットノ時間ニシタカッタシネ」

ボイスチェンジャーの独特な声が告げる。

その手には……ナイフ。

どうやらオオカミ男は懐が出したナイフを振り回していた。触
れただけで血が噴き出しそうな鋭く禍々しい刃。

銀色の切っ先が、俺に向けられていた。

「サスガノキミモ、手足ノ筋ヲ切レバユツクリ休ンデクレルダロウ。
本当ハココマデシタクナカッタケド………仕方ナイカナ」

マズハ左手ダ、と一直線にナイフが振り下ろされる。

……終わるのか。挑発して終わるのかよ。いや、終わらない。
終われない。

それに、終わったら（負けたら）護れない。

ジローを、紅羽ちゃんを、涼月を、近衛を……。だから、ここでオオカミ男に負けるわけにはいかない！

鋭い輝き。

迫りくる禍々しいナイフ。

その鋭利な刃が俺に突き刺さろうとしたが――

ナイフは突き刺さらなかった。俺の右手でナイフを受け止めた。

「……っ！」

ポタリ と建設中アトラクションの床に赤い雫がこぼれ落ちる。

刃を握り締めたせいで右掌が切れてしまったんだな。

自分でも驚くように冷静な判断だったが……オオカミ男から放たれる膝蹴りを避けることができなかった。

「……ぐはっ！」

握り締めていたナイフは放物線を描くかのように宙を舞って、床に落ちた。

……ヤバ……い

視界が霞んでいく……。

「ヒヤハハハハッ！ サスガノセイジクンモココマデカ。残念ダヨ」

血が付着したナイフ。

その鋭利なナイフがもう一度俺に突き刺さろうと振り下ろされた………が

「待たせたな、誠時」

透き通ったアルトボイス。

この声は、もう聞き慣れている。

小さな掌で鋭利なナイフを受け止めた人物は、静かに微笑んでいた。

「………ご、近衛！」

俺の目の前にいたのは間違いなく近衛だった。

近衛スバル。

涼月奏の執事に違いなかった。

「誠時、ここからはボクの仕事だ」

ナイフを握りしめていたオオカミ男の手首を握り締めていた近衛。

「遅カッタジャナイカ、執事クン」

オオカミ男は、あっさりとナイフを手放して距離をとる。
手放したナイフは床に落ちた。

「残念ナガラナイフハソレ一本ダケジャナイヨ」

言葉の通りだった。

オオカミ男は懐から同じような形の鋭利なナイフを取り出して、
構えた。

「震エナクテイイノカイ？ 前ニココデ会ツタトキ、キミハ泣キナ
ガラ震エテイタネ。ナイフヲ突キ付ケラレテ脅サレテサ。マルデ哀
レナ小羊ミタイニ、ガタガタ震エテイタジャナイカ」

「……そうだ。でも、今は違う！」

と。

その綺麗に透き通った瞳は真っ直ぐにオオカミ男を見つめている。それはまるで、突き刺すように。

「ボクは……」

近衛は自分に言い聞かせるようにゆっくりと口唇を動かした。その手は、微かに震えていた。過去のトラウマ。

刃物恐怖症。

きつと、この場から逃げ出したいくらい怖いかもしれない。倒れた方が楽なくらいに苦しいかもしれない。

でもコイツは。近衛は、今必死にそれと戦っている。

ただ、自分の大事な人を護るために……。

「ボクは……執筆だ！」

言って、近衛は震える手を包み込むかのように指を握り締めた。

「だから、そんなナイフなんか怖くないっ！」

覚悟を決めたように強く握り締められた二つの拳が構えられる。ヒツジ。

その姿はやっぱり羊に見えた。

食に飢えた狼に襲われた小さな小さな羊。

狼の獰猛な牙に震えながらも、必死に逆らおうとしている。哀れな小羊は、悲鳴を上げる間もなく獰猛な牙によって息の根を止められる。

そして喰われて終わり。

弱肉強食。

弱者は強者に殺される。

それがこの世界のルールだ。でも――。

一匹ぐらいは、狼を殺す羊がいてもいいかもしれない。

窮鼠猫を噛む。

下克上。

想定外。

どんな言葉でもいい。

たまには狼に牙を立てる羊がいてもいいはずだ。

狼の獰猛な牙をヘシ折ってやれる羊がいてもいいはずだ。

狼のノドに喰らいついて噛み殺す羊がいてもいいはずだ。

そんな馬鹿げたファンタジーも悪くないな。

だからさ……頼んだぜ近衛。

オオカミ男がナイフを構えて近衛に突っ込む。

疾い。

輝くナイフ。

獰猛な牙のように尖った刃。しかし、近衛は避けようとしなかった。　　しかし、近衛は避けようとしなかった。

いや……避けるどころか、

近衛は突き出されたナイフを飛び越えるように跳んでいた。　　綺麗に宙を舞う身体。

驚くことに、そのままナイフを踏み台にするように足をかける。

「はああああああっ！」

咆哮。

ナイフを踏み台にしてさらに高く跳んだ近衛の身体が……

背中が見えるくらい勢いをつけた回転。

ただ蹴りの威力を上げる為の加速。

そう、蹴りなんだ。

この技を、俺は知っている。前に友哉と大地と一緒に格ゲーをしていたとき、俺がよく使うキャラクターの必殺技だ。

ローリング・ソバット。

綺麗な弧を描く右脚。

抉るようなその一撃が、オオカミ男の顔面に突き刺さる……。

「……………」

蹴りの威力に無言でふっ飛ぶオオカミ男。その身体が立ち上がることはなかった。どうやら、一撃で勝負は決したみたいだ。

気絶。

完璧過ぎる。

カウンターでのローリング・ソバット。

最強だ。

たった一発で、狼のノドを喰い干切った羊。

…………… かつこいいな。近衛。悔しい気持ちは無いと言えば嘘になるけどさ。でも、今なら「クールでかつこいい」って騒いでいる女子たちの気持치가わかった気がする。

近衛スバル……………スバル様……………か。
ホント、かつこいいよ。
っ！くっ……………血が。

「誠時。手、大丈夫か？」

こちらに振り向く近衛に俺は血が出ている手をポケットの中に入
っ込む。

「っ……………大丈夫だ。近衛、三人はそのドアの奥だ」

と言った瞬間、近衛は駆けだした。

俺は脛の上から流れ出している血をもう一度拭ってからドアへと
向かう。

ドアの向こう。

そこにあっただのは六畳ほどの部屋。

床に寝かされている三つの人影……………。

「ジロー！ 紅羽ちゃん！」

横になっているジローと紅羽ちゃんに駆け寄る。……………よかった。
怪我はない。薬か何かで眠らされているだけなのか？

「スバル、誠時くん」

目が覚めたのか、涼月が虚ろな声を出した。

「お嬢様」

近衛は、いや執事は主のところまで駆け寄り、ゆっくりと主の身体を抱きかかえる。その綺麗に透き通った瞳には透明な涙が浮かんでいた。

「申し訳ありません。お嬢様。ボクが気を抜いたせいでお嬢様と紅羽ちゃんとジローをこんな危険な目に遭わせてしまいました。ボクは……………執事失格です」

ひどくしゃがれた声で精一杯に告げる。

それに応えるように、涼月はただ優しく純粹に微笑んだ。

「そんなことないわスバル。あなたはちゃんと私を護ってくれたじゃない。主としてこんな優秀な執事をクビにするなんてできないわ」

穏やかな音色。 穏やかな声。

それが引き金だったように、近衛はポロポロと泣き始めてしまった。

そして、くしゃくしゃになった声で呼ぶ。
自分の主の名前を……。
いや、違うな。

昔のような呼び方で……。

「……………カナちゃん」

「なあに、スバル」

「こんなボクでも……………こんなダメな執事でも、カナちゃんの側に
いていいかな？」

「ええ……そうね」

優しく微笑みながら、涼月は自らの執事に……命令した。

「これからもずっと、私の側にいなさい。執事として……………それに、
友達として。一生私の側に仕えなさい。これは命令よ、スバル」

「……………はい。かしこまりました、お嬢様」

主と執事。

涼月と近衛はお互いの関係を確かめ合うように見つめ合っていた。

『友達・主・執事』としての関係を……………。

よかったな……近衛、涼月。また昔みたいに友達関係に戻れたんだから。よかったな……涼月。『カナちゃん』って呼んでもらって……さて、これで一件落着かな。

と。

不意に。

背後から、パチパチ と乾いた音が響いた。

振り向くと、扉の前にいたのはオオカミ男。

近衛の蹴り。ローリング・ソバットによって倒されたはずの誘拐犯が、なぜか手と手を叩いて拍手をしていた。

「おまえ……まだやるつもりか……！」

近衛が再び拳を構える。

しかし……オオカミ男はそれに応えなかった。

先ほどまでの軽薄な機械仕掛けの声も聞こえない。

誘拐犯は、ただ静かに……オオカミマスクを脱ぎ捨てた。 ……

……暴かれる素顔。

精悍な顔つきに鋭い眼光。黒のスーツが似合う長身瘦躯に落ち着いた表情……おそらく三十代前半くらいかな。

オオカミマスクのせいで乱れた髪型を整えたあと、その男はゆっくりと懐から出した黒縁眼鏡をかけた。

「なっ……」

現れた黒縁眼鏡をかけた男の顔を見て、近衛は口をポカーンと

開けていた。

……誘拐犯に会ったというより、街中ではったり知り合いと会ったみたいな反応だな。驚愕に目を丸くさせながら、近衛は口をパクパクさせていた。

男はタイミングを計るように眼鏡を　くいつ　と上げてから、

「スバルうううっっ！」

……
……。

俺の意識が五秒くらい止まった。

容姿に似合わない声を上げながら、近衛に抱きついた。

……なに、この展開。にしても誰ですか？なんで近衛に抱きついているんですか？

「近衛流。　スバルの父親」

……ん？

……え、本当ですか？

平然と、立ち上がり、平然と、なんでもないことのように涼月は言った。

「ちなみに、涼月家現当主……つまり私の父の執事をやってるわ」

「……なるほど」

「意外と……冷静ね」

冷静か……。

状況確認。

目の前には、悪戯っぽく口唇を歪めている涼月と、呆然とする近衛を強引に抱きしめている近衛流。

まあ、可笑しな部分はあったんだけど、あんまり信じたくなかったんだろうな……。

……なんとか気力で立っていたけど、もう……無……理……だ。

そうして、俺の意識は深い闇の世界へと落ちていった。

x

………白い光。

天井に浮かぶ見慣れないシャンデリア。 ゆっくりと回復した視界がそれを捉えたとき、俺は目を覚ましていた（覚醒していた）。

「………痛っ」

軋むような疼痛。ん？身体のあちらこちらには丁寧に包帯が巻かれている。誰がしてくれたのかは知らないが懇切丁寧に治療してくれた上に水着から私服に着替えさせてくれたらしい。一応、感謝しておくかな。にしても、ここは一体どこなんだ？

そんなことを思いながら上半身を起こして周囲を確認する。高価そうな家具に上品な絨毯。まさかに豪邸だな。その部屋のベッドに俺は寝かされていたわけか。

「よう、起きたか」

豪華な部屋の隅から響くハスキーボイス。

きつちりと整った髪型に黒縁の眼鏡。

近衛流。

近衛流さんは近衛スバルの父親らしいんだ。

黒いベストに綺麗にしまったパンツ、わからない人にはズボンっ
て言えばいいのかな？それと固く結ばれたネクタイ。きつと執事の
正装なんだろうな。格好が近衛スバルと似ているもんな。それに、
この人の外見にはそれがぴったり似合っていた。なるほど。こん
な格好をしているってことは、ここは涼月の家か。予想以上だな。
本当に豪華な家……いや屋敷というべきか。

「怪我は大したことない。骨も折れてないし、治療も万全だ。まっ、
手加減してやったからな」

「万全か……」

俺はナイフを握り締めた右手を見ると、右手にも丁寧に包帯が巻かれてあった。

「右手の心配ならするな。傷が浅かったからな一生傷にならないぞ」

「……そうですか。それよりジローと紅羽ちゃんは？」

「安心しろ。あの娘とあのラブコメ野郎なら隣の部屋で眠っている。元々あの娘だけは傷つけないようにする内容（シナリオ）だったからな」

シナリオか……。

「だけど、“あの娘だけ”って言葉が引つ掛かるぜ。まさかジローは薬ではなく殴られて気絶していたのか！？いやいや、考え過ぎか。けれど、やっぱり、あのレジヤールランドでの一件は全て涼月が作った計画だったってことだな。」

狂言誘拐。

おそらく、わざわざそんな面倒なことをした理由は……。

「あの、一つ訊いていいですか？」

「なんだ。『お義父さんって呼ばせてください』って頼み以外なら訊いてやるが」

「……なら、ラブコメ野郎ってのは誰のことなんですか？」

「ああ。オレの娘を人気のない理科室で押し倒して胸を触って鼻血を出した害虫のことだ。確か名前は坂町というヤツだ。アイツに効く薬があつたら世界中にバラ撒くいてるな」

……親馬鹿なのか？この流って人、心底ジローのことが嫌いみたいだ。まあ俺も嫌われているんだろうな。でも、親馬鹿か………やっぱり家族って羨ましいや………。

「おまえは大したヤツだとわかったさ………だが、オレはおまえが嫌いだ」

近衛流……いや、近衛スバルの父親……いや、オッサンは部屋の扉あたりから人差指（ひとさしゆび）で指してきた。俺は溜息を吐き出して後頭部を掻き回す。

「………そうですか。初対面の相手に嫌いっていう大人がいるんだな」

「なに、クールになってやがる」

「はつきり言ってるよ。俺もアンタのことが五秒前から嫌いになったよ」

「言っじゃねえかクソガキ」

はぁ……………。

ん？なんか最近溜息吐き出し過ぎじゃないか？うーん、気のせい
か。

レジャーランドのことを訊こうと思ったんだけど、こんな空気と
関係じゃ訊く気が失せるぜ。

でも、近衛は大事に大事にされているんだな……………。

ガチャツ……………

そんな音が聞こえたと思えば扉の方向に視線を移動させると、いつ
の間にか開いていたドアと涼月奏が部屋に入ってきたのだ。

今の涼月の格好は学園でいるときのようなブルジョワな感じの服
装である。

「流。もう下がっていいわよ」

「かしこまりました。奏お嬢様」

近衛流は仰々しく頭を下げると、さつさとドアから出て行った。さすがだな執事って仕事って。近衛、敢えてスバルと言わせてくれ。（ちよつと恥ずかしいけど）スバルを見ていても『すげーな』って思うのに、スバルの父親、近衛流さんは完璧過ぎるくらいの礼儀正しい態度でいた。まあ、主の前限定かもだけどさ………それでも、執事ってすごい仕事だ。

「悪い人じゃないんだけどね。スバルのことになるとちよつと周りが見えなくなっちゃうのよ」

「ちよつとか……あれはどう見ても親馬鹿な気がするけど？」

顔に似合わない声出しながら抱きついていたし。スバルが親と仲が悪いつて言った意味が、なんとなくわかった気がする。きつと父親が必要以上に付きまとうからじゃねえかな。普段からあんな調子だとしたら………疲れる親だな。

「そうね。まあ流にとってスバルはたった一人の家族だから、過保護になるのも無理はないわね」

「たった一人？」

……そういえば、近衛は母親の話とかしなかったな。じゃあ……
母親は……。

「スバルの母親はあの娘が五歳のときに亡くなったわ。元々身体がひどく弱くて、スバルを産んだのがきっかけて……」

「……前にさ、保健室で近衛の話を持ち聞きしていた時に言っていたよな。女の子は本来、執事の仕事をできないって」

そう、以前だ。俺が涼月と近衛とジローと知り合った、あの日。近衛には兄弟がいないって言ったのはそういうことだったのか。母親がそんな身体の状態だったんじゃ近衛の後に子供を産めなかったんだろうな。跡取り的なことを考えれば男の子が欲しかったはずだ。

「ええ。そうよ。私の家の人たちも流に再婚を勧めただけど、スバルが泣きながら反対したの『新しいお母さんなんかいらさない！』って、きつと怖かったのよ。自分の母親の存在が消えていってしまいうみたいで」

『ボクは、どうしてもお嬢様の執事でいなくちゃいけないんだ』
初めて出会った日の保健室で、近衛はそう言っていた。

………存在か。

涼月の言う通り、近衛は執事をやることで母親の存在を守りたか

ったのかもしれない。

「だから、あんなに必死になっていたのか……」

「巻き込んでしまって、ごめんなさい」

涼月は苦々しく言葉を出した。

そんな彼女は俺を見つめながら言う。

「あなたがスバルと出会ったとき、私はこれ以上のチャンスはないと思ったの。誠時くんのように何かを失っているあなたと触れ合えば、スバルの恐怖症に何か改善があるかもしれないって思ったの」

「それが、今日の誘拐事件の真相ってことか」

「ニヤハハハハッ！ アア。正解ダヨ、セイジクン」

と再びあのボイスチェンジャーで弄っていたオオカミ男の声がした。よく見ると涼月が口に小さな機械を当てて話していたのだ。

「その声、涼月だったんだな」

……少しの可能性としては考えていたことだ。その理由となったのが『セイジクン』この一言だ。犯人が俺の名前を知っているって

ことがポイントだったんだよな。……まあ、いいか。もう一件落着
していることなんだし。

「ええ。それに、スバルの恐怖症を克服できた。まだ完全ってわけ
じゃないでしょうけど。それに、あなたたちのおかげで、スバル
は私の執事をやめなくて済んだんだから。本当にありがとう」

と涼月は深くて尚且つ上品な仕草でお辞儀をした。

……よかった。

本当によかったな。涼月。近衛といい感じに戻れて……。ま
あ、たまには掌の上で華麗に踊るのも悪くなかったな。

「まあ、お前、近衛流さんのこと過保護って言えないな」

でも、ちょっとくらい棘がある言い方をしてもいいだろう。し
かし……何故か涼月はくすくすと上品に笑っていた。

「ええ、そうね。だって、私はスバルのことを愛しているから」

「……………」

愛している？

アイシテル？

なんだ、その意味深な言い方は。
まるで……近衛のことを恋愛対象として見ているみたいな感じだ
な……。

「本当よ。私のスバルなの」

「……………はい？」

……………。

……………。

いや、そんな……………何を言ってるんだ？涼月奏は。

……………ふう。まっ、いいか。たまには騙されるのも悪くなかったか
らな。

「そつだ。せつかくだから夕食も食べて行きなさい。準備ができた
ら呼びに行くから」

涼月は俺の返答も待たずにドアへと歩いて行った。そしてドアを
くぐる寸前で くるり と振り返る。

「誠時くんのおかげで、スバルは私の執事を続けられるようになった。
そしてなにより、私と私の執事の友達になってくれて、ありがとう」

にこやかに微笑んで、涼月は部屋から出て行った。

……………ありがとう……………か。

なんか不意打ち食らったみたいだ。

すごく嬉しかった。それに……………可愛い……………はっ！俺は何考えているんだ。あの笑顔は……………反則だ。ヤバい……………こういう時は、どうやって気持ちを抑えるんだ！

と。
俺が頬を抓っていると、開けっ放しのドアの前にいた人物に名前を呼ばれた。

「誠時。入っていいか」

澄み切ったアルトボイス。

近衛スバルだった。

いつもの服装だな。執事の正装に身を包んでいる。さっきの人も同じ格好をしていたが、やはり、近衛スバルのが凛々しくて似合ってる。やっぱりスバルが着た方が断然似合うよな……………って、何考えているんだ！俺は！

「ああ、どうしたんだ？近衛」

コツコツ と靴音を立てて歩く近衛。

ベッドの横に立って、俺を見つめている近衛スバル。

……………もしかして心配して様子を見に来てくれたのかな？なんだかんだ言っても近衛は良い奴だからな。

「ああ。『あとでなんでも言うつことを聞いてやる』って、誠時はボクを殴った時に言ったぞ」

「……………あれは、確かに、そう言ったけど」

一瞬、戦慄が背中を駆け抜ける。……………あの一言を覚えていたのか……………。確かに嘘じゃない。『なんでも言うつことを聞いてやる』と言いました。はい。言いました。そんな俺は心内で一人突っ込み（ツッコミ）をしていた。

……………すると、それは唐突な出来事だった。

そう、突然、肌を感じる柔らかな感触が俺の身体を包んだ。ふわりと漂う花のようないい香り。近衛が、スバルが、俺の身体に抱きついていったんだ。

「近衛……………、スバル……………あつ」

思わず普通に名前を呼んでしまったが、ツッコまれることはなかった。

それは、俺にとってある意味鈍器で殴られるよりも衝撃的な光景だった。

近衛が……………俺の胸に顔を埋めながら、嗚咽を上げていたのだ。

「……………バカ誠時い」

震える声で近衛は……………小さく呟いた。

「……すごく、怖かったんだぞ……」

怖かった。

それは、言わずもながら刃物のことだろう。

……当たり前だ。近衛にとって刃物は最大級のトラウマだとた。いくら主を護るためとは言っても、そのトラウマに真っ正面から立ち向かったんだ。きつと、今頃になって恐怖が溢れてきたんだろな。

「……近衛、お前はちゃんと涼月を護っただろ。もう近衛は欠陥品なんかじゃないよ。刃物恐怖症だって、これから時間をかければきつと……」

と言った。

瞬間。

近衛は唐突に顔を上げる。

「違う、違う違う違うッ！　ボクが怖かったのはそんなことじゃないっ！」

ポロポロ　と大粒の涙を零しながら、そう絞り出した。

「もう二度と誠時に会えないかもしれない……あのナイフで刺されて……」

「……………」

「そつ、そう考えたら、怖くて……怖くてっ！　せ、誠時が……初めてボクのことを友達って言うてくれた誠時が……学園の友達が……死んじゃうかもって思ったら、本当に怖くて……っ！」

「……………」

俺の正面にいる彼女の両肩を優しく両手で触り、静かに近衛の背中を抱き寄せた。

「……………」
「ごめんな」

「……………」
「ば、ばか。謝ったって……絶対許してやらないからな……………」
「！」

俺の胸に顔を埋めながら泣いている近衛。
揺れるしなやかなで綺麗な髪。

どこまでも弱々しい強がりをする羊。

俺の近くにいる近衛は、あのオオカミの牙に……自分のトラウマに悠然と立ち向かったクールでかっこいい近衛スバルはいなかった。俺の近くにいた近衛スバルは、小さくて、細くて、可愛くて、強く抱きしめたら今にも壊れてしまいそうな少女の姿……………。

「ばか、ばかばかばか。ばかあ…誠時い」

…護ってやりたい。近衛の側にいたい。いや、俺の側でいて欲しい。

俺は、そう思った。

近衛を…弱々しい彼女を護ってあげたいと…思った。

でも、それには、きつと今のままではダメだ。

弱い。俺も弱い。包帯や絆創膏に塗れたこんな情けない姿。あんな簡単にボコボコにされるようでは、俺は弱い。弱すぎる。

「……………」

だから、もっと強くなる。強くなりたくてではなく“強くなる”だ。もう心配されることのないくらいに…近衛が二度と泣かなくて良いように、もっと強くなる。どんな危険が来たとしても、近衛の側にいて護ってやれるくらいの男に……………。

「……………」

そうだったのか。

あの時は、たまたま思い出しただけだった。けど……………。

やっとわかったよ母さん。

母さんが最期に残した言葉の意味が。

真心を持つ。大事な人たちを護る。

それは、俺の側にいて欲しい。

それを、その言葉を大事な人たちに伝えるようになること。大切な人たちの側にいること。側にいて護ってあげること。それができるくらい――

「誠しい……………」

彼女は静かに顔を上げた。涙に濡れた顔。

僅かに潤んだ綺麗に透き通った瞳。

お互いの口唇が触れ合いそうな距離。そして、お互いの視線が合った。

「ふあっ！」

「……………」

俺の身体から離れて顔を俯かせる近衛。

真っ赤。

今までなんとか堪えていた糸が切れた。…………近衛…………を抱きしめていた……んだよな……。

そんなことを心で思っていた。

いい雰囲気だった？あー、ごめん。情けないことに今の俺には抱きしめてやることしかできなかつたんですよ。

「せ、誠時！あ、あり……が………」

ん？あり…？が？蟻？
と。

近衛が必死に何かを言おうとしているときだった。

開けっ放しの部屋のドアに勢いよく入ってくる人影が一つ。勢いよく入ってきた人物に目を向けると、そこにいたのはショートカットの似合う女の子。坂町近次郎、まあフルネーム呼びは駄目だから、ジローだな。ジローの妹。

坂町紅羽ちゃんだった。

「近衛先輩！？」

紅羽ちゃんは俺に軽くお辞儀をして一目散に近衛に駆け寄った。
ふむ。いい妹だな。ジローよ。

「なんで、そんなに目を赤く腫らしているんですか！？」

- - 何でもないよ紅羽ちゃん。
と涙を拭って心配させないように微笑んだ。

「あたしの兄さんがお姉様と付き合ってるのは本当なんですか！？」

近衛先輩！！大村先輩！！」

「ジローとお嬢様が付き合っている……もうそういう関係だったんだ……」

……。

ヤバイ。

俺のことじゃないけど、ヤバイ。

極度の怒りを乗せた声。

凍りつく空気。

室内のはずなのに冷たい風が背中を通り過ぎたような気がしてきた。

「さあ！行きましょう近衛先輩！！」

「ああ。行こう紅羽ちゃん」

近衛の顔は、ひどく冷え切った笑みを浮かべていた。

………ジロー。

お前、殺されるぞ。

そう心の中にいるジローと会話をしていた俺に、

「誠時は待っていてくれ。夕食と一緒に食べよう」

……少し頬を赤く染め優しく微笑んで、近衛は紅羽ちゃんと一緒に部屋から出て行った。

……。

「……反則だ」

俺は頬を人差し指で軽く搔きながら、心臓が落ち着くのを待つ。

まだ心臓が バクバクしているな。

なんだろ女の子って……。

涼月と近衛。

あんな可愛いかったのか……。

俺は落ち着かない気持ちを落ち着かせるために一度、ベッドから抜け出す。

「……ん？」

この部屋の窓の下から声が聞こえる。

俺は部屋の窓から上半身だけ乗り出して様子を見る。

「……広いな」

そこに広がっていたのはちょっとした運動公園くらいありそうな立派な庭だった。

ん？涼月の腕を引っ張って走っているジローを発見。
ん？あれは……ジローと涼月の背後には獵犬と化した紅羽ちゃん
と近衛の姿があった。

追いかけている二人は、何かを叫んでいた。

「待てー兄さんー！！今なら特別に瞬獄殺一発で許してあげる
よー！それともフランケンシュタイナーがいい！？」

「逃げられると思うなよ！」『エンド・オブ・アース』を今度こそ叩
き込んでやるからなっ！」

ジ、ジロー。捕まったら即天国だぞ。頑張れ、死神から逃げろよ。

「……にしても『エンド・オブ・アース』か。なんかスケールがデ
カイ攻撃だな」

俺は軽く欠伸をしていると……

ケータイに、メールが来た。誰だ？そう思い黒の折りたたみ式
携帯電話を開きメールを確認すると……。

涼月からだ。

『あなたたちといると退屈しないわ。これからは毎日がこんな風
に楽しくなるんでしょうね』

楽しくか……。

ゆっくりとケータイの液晶を見ながら自然と頬が緩むのがわかっ
た。……。

近衛と涼月とジローと紅羽ちゃん。

まだまだ増えるだろう友達のことを考えていたら笑いが止まらなくなる。

ホント、涼月の言う通り、退屈だけはしなくて済みそうだな。

「……………これで、いいかな」

視界に映るのは庭で走り回っている、俺の友達。

茜色の空に浮かぶ夕陽が涼月たちを照らしている。

その綺麗に輝く茜色に向かってメールを返信する。

返信してから30秒後……………ジローが開き直るかのように叫んだ。

「やっぱり、女の子って怖えっ……!!」

引っ張られている彼女の携帯電話の液晶に書かれてあるメール内容は……………。

『これからも、よろしくな涼月』

と書かれてあった。

こうして、俺たちの日曜日は終わりを迎えるのだった。

第六話 許してやらないからな（後書き）

【迷える執事と秘密の恋】を一話ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【迷える執事と秘密の恋】を六話まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

お久しぶりです！前回投稿9月20日なはず。5日ぶりです！次回をラジオにするか本編にするか悩んでいる作者。阿良々木雅です。いえ、本当に迷って悩んでいるんです。久しぶりの執筆でなかなか筆が動かなく【緋弾のアリア】も執筆途中という有様です。けれど、ハイペースで行きたい予定です。

ついに、この【迷える執事と秘密の恋】略して『まよこい！』も第六話に突入です！まだ六話かよ！なんて言わないでください（汗）。

アニメもいよいよクライマックスです。『MBS』なんで放送が遅れてます。

そろそろ感謝を。

『まよこい！』第六話を投稿できたのも、本当に読者の皆様のおかげです。心より、深くお礼申し上げます。

さてさて、ここで恒例の次回予告のコーナーを。

後書きの最初に書いたように、まだ未定となっております。前書きに書いたことについて、お話をさせていただきます。感想の場合は『まよこい！』のキャラクターたちが感想を読み上げます（かなり短い紹介です）質問の場合の例を出します。『大地くんと友哉くんの身長はどちらが高いですか？』や『涼月さんは、どんな風に弄ぶのが好きですか？』このような質問を書いてくださると作者なりに、いえ、キャラたちなりに考えて応える予定です。勿論、主人公の質問もジャンジャンしてください。

ではでは。また皆様とお会いできることを願ひ祈りつつ、『迷え

る執事と秘密の恋』の筆を動かしながら、アクセル全開で突っ走って行きたいと思えますので、どうぞよろしくお願いします。

【迷える執事と秘密の恋】略して【まよコイ!】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれそうですよ。

初PV34000突破!

皆様の応援がある限り、誠時や近衛や涼月やジローたちは次へ、次へと歩みを進み続けます。

第七話 一奉仕しちゃうにゃん (前書き)

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『まよチキ!』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
どうも20日ぶりの投稿です。

阿良々木 雅と申します。

最初にすみませんでした。よく見れば脱字などが多い作品で。少し
執筆に力が入らなくなり、20日間緋弾のアリアに執筆に力を注い
でいました。これからはこまめに更新していきますのでよろしくお
願いします。脱字なども無くしていきたいです。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では第七話を楽しんでください。

第七話 一奉仕しちゃうにゃん

季節は五月初盤ぐらい。

詳しく言えば、ゴールデンウィークの初日ぐらい。

この日、偶然すごいくらい早く起きてしまった俺は徐々に手の込んだ朝食を作った。作り終えた後にシャワーでも浴びてから食べるかと思っていたんだが……まさか、あんなことになってしまっうなんて、この時は何も思いも考えも予想もしてなかった。

×

只今の現在時刻は朝の07時30分ジャストといったところだ。シャワーを浴び調理し終えた俺は食卓に並べたチャーハンに餃子に八宝菜に烏龍茶を眺めている。

「ちよつと、作り過ぎたな。まあ、いいか。とりあえず食べるか」

と、俺意外誰もいない食卓で独り言を呟く。食べ終えたら、大地たちと遊びに行くか。

んー、なんて自由なんだろうか。やっぱり休日は最高だな。

とりあえずテレビを点け、録画しておいた人気アニメ（友哉才

ススメ）『緋弾のアリア』を見ながら食卓の椅子に座ろうとした時だった。

突如、ピンポーンと。

玄関のインターホンが鳴った。

どうやら誰かが訪ねて来たみたいだ。

「……………誰だ？こんな休日に」

恐らく新聞勧誘か保健用食品の販売などの類だろう。ゴールドンウィークだったのに仕事の精が出ているな。

ピンポーン……………ピンポーン……………ピンポンピンポンピンポン。

「……………連打！？ってうるさいな」

ピンポンピンポンと怒涛の勢いでインターホンが連打されている。かなりのテクニシャンだ。余程仕事熱心な新聞勧誘さんだな。

「……………今、出ますよ。ちょっとお待ちください」

少し溜息を吐き出しながら玄関まで行って、鍵を開ける。

ちなみに現在の格好はジャージのズボンにフードという非常に楽な部屋着だが気にすることはないだろう。新聞勧誘さんにそこまで気を張る必要もないからな。

そして扉（ドア）を開けると……………

そこに居たのは猫耳執事の近衛スバルがいた。すると頬を桃色に染め、きつと触ったり触れたりすると柔らかそうな口唇を一生懸命動かして……………

「ご、ご主人様。もしボクを泊めてくれたら……………いっぱいご奉仕しちゃうにゃん」

向かい合う俺、大村誠時と猫耳執事近衛スバル。

俺の脳内は……………

カッキーンと。

豪速球を場外ホームランされたようにパニックになっていたのだ。った。

こうして、予想もしなかった俺のゴールデンウィークが始まりを告げた……………。

第七話 ご奉仕しちゃうにゃん (後書き)

【迷える執事と秘密の恋】を一話ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【迷える執事と秘密の恋】を七話まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

20日ぶりの投稿です。どうも、阿良々木 雅です。

最初に本当にすみませんでした。この作品がほぼ初投稿作品？でして脱字など多くて。以後は頑張って執筆したいと思っています。では、これからも『迷える執事と秘密の恋』をよろしく願います。

では、次回予告なのですが、第八話はまさにゴールデンウィーク真っ只中な内容になりそうです。

ではでは。これから、また皆様とお会いできることを願い祈り張りつつ、アクセル全開で突っ走って行きたいと思しますので、どうぞよろしく願います。

【迷える執事と秘密の恋】略して【まよコイ!】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

更新確認しやすいようにしただけ

季節は五月初盤ぐらい。

詳しく言えば、ゴールデンウィークの初日ぐらい。

この日、偶然すごいくらい早く起きてしまった俺は徐々に手の込んだ朝食を作った。作り終えた後にシャワーでも浴びてから食べるかと思っていたんだが……まさか、あんなことになってしまうなんて、この時は何も思いも考えも予想もしてなかった。

×

只今の現在時刻は朝の07時30分ジャストといったところだ。シャワーを浴び調理し終えた俺は食卓に並べたチャーハンに餃子に八宝菜に烏龍茶を眺めている。

「ちよつと、作り過ぎだな。まあ、いいか。とりあえず食べるか」

と、俺意外誰もいない食卓で独り言を呟く。食べ終えたら、大地たちと遊びに行くか。

んー、なんて自由なんだろうか。やっぱり休日は最高だな。

とりあえずテレビを点け、録画しておいた人気アニメ（友哉才

ススメ）『緋弾のアリア』を見ながら食卓の椅子に座ろうとした時だった。

突如、ピンポーンと。

玄関のインターホンが鳴った。

どうやら誰かが訪ねて来たみたいだ。

「……………誰だ？こんな休日に」

恐らく新聞勧誘か保健用食品の販売などの類だろう。ゴールドンウィークだったのに仕事の精が出ているな。

ピンポーン……………ピンポーン……………ピンポンピンポンピンポン。

「……………連打！？って うるさいな」

ピンポンピンポンと怒涛の勢いでインターホンが連打されている。かなりのテクニシャンだ。余程仕事熱心な新聞勧誘さんだな。

「……………今、出ますよ。ちょっとお待ちください」

少し溜息を吐き出しながら玄関まで行って、鍵を開ける。

ちなみに現在の格好はジャージのズボンにフードという非常に楽な部屋着だが気にすることはないだろう。新聞勧誘さんにそこまで気を張る必要もないからな。

そして扉（ドア）を開けると……………

そこに居たのは猫耳執事の近衛スバルがいた。すると頬を桃色に染め、きつと触ったり触れたりすると柔らかそうな口唇を一生懸命動かして……………

「ご、ご主人様。もしボクを泊めてくれたら……………いっぱいご奉仕しちゃうにゃん」

向かい合う俺、大村誠時と猫耳執事近衛スバル。

俺の脳内は……………

カッキーンと。

豪速球を場外ホームランされたようにパニックになっていたのだ。
った。

こうして、予想もしなかった俺のゴールデンウィークが始まりを告げた……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4873v/>

迷える執事と秘密の恋

2012年1月9日23時48分発行